

# 愛宕澤遺跡発掘調査報告書



2004

新津市教育委員会

## 例 言

1. 本書は新潟県新津市草水町2丁目224番地他に所在する愛宕澤（あたござわ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は民間業者の宅地造成（予定）に先立ち、新津市教育委員会が調査主体となり発掘調査（確認調査）を実施した。
3. 平成10・12年度に発掘調査を行い、平成15年度に報告書作成に係る整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
4. 出土遺物・発掘記録は新津市教育委員会が一括して保管している。
5. 本書の編集は立木宏明（新津市教育委員会）が行った。執筆は第Ⅴ章3は澤野慶子（新津市教育委員会嘱託）、第Ⅵ章は下記、その他を立木が行った。
6. 「第Ⅵ章 愛宕澤遺跡の火山灰分析」は早田 勉氏（古環境研究所（株））に執筆頂いた。
7. 本書で用いた写真は、遺跡写真は渡邊朋和（新津市教育委員会）・立木が撮影し、遺物写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に撮影頂いた。
8. 本書で示す方位は全て真北である。
9. 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（所属・敬称略、五十音順）  
朝岡政康・安藤正美・伊藤秀和・遠藤 佐・小熊博史・小野 昭・加藤 学・金子拓男・小林達雄・小池義人・佐藤雅一・澤田 敦・菅沼 亘・鈴木 暁・鈴木俊成・高橋春栄・高橋保雄・立田佳美・田中耕作・田中祐二・谷口康浩・堤 隆・寺崎裕助・土橋由理子・中村由克・廣野耕造・福田仁史・藤野次史・細野高伯・前山精明・増子正三・森 淳・山崎 天・吉井雅勇・野村忠司・渡辺哲也  
新潟県教育庁文化行政課・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 凡 例

1. 本書は本文と別表と巻末図版（図版・写真図版）からなる。
2. 本書の注は各章の末尾に記した。引用文献は著者と発行年を〔 〕文中に示し、巻末に一括して掲載した（但し、第Ⅵ章は各説の末尾に記した）。
3. 遺構番号は現場で付したものを用了。番号は遺構の種別毎に付さず、通し番号とした。
4. 土層の土色観察は『新版 標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局監修1967〕を用了。
5. 土器実測図は断面の表現を種別で区別した。黒塗は須恵器で、それ以外は白抜きである。
6. 遺物実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては中軸線の両側に空白を作って区別している。
7. 本書に掲載した時代区分は縄文時代、古代と記述している。古代については平安時代にほぼ限定できる。
8. 遺物の注記は遺跡名の愛宕澤遺跡の略記号「AZ」とし、取上Noや出土地点、層位を続けて記した。平成10年度出土遺物は略記号の前に「98」を付し、平成12年度出土遺物は略記号の前に「01」を付した。

# 目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	2
1 遺跡の位置と地理的環境 .....	2
2 周辺の遺跡 .....	2
第Ⅲ章 調査の概要 .....	3
1 確認調査の方法 .....	3
A 調査方法 .....	3
B 調査経過 .....	3
C 調査体制 .....	3
3 整理作業 .....	4
A 整理方法 .....	4
1) 遺構・遺物 .....	4
第Ⅳ章 遺 跡 .....	5
1 遺跡の概要 .....	5
2 層 序 .....	5
3 遺 構 各 説 .....	6
A 縄文時代草創期の遺構 .....	6
1) ブロック1 .....	6
第Ⅴ章 遺 物 .....	7
1 縄文時代草創期の遺物 .....	7
2 その他の縄文時代の遺物 .....	8
3 古代・中世の遺物 .....	8
第Ⅵ章 愛宕澤遺跡の火山灰分析 .....	9
1 はじめに .....	9
2 火山ガラス比分析 .....	9
3 屈折率測定 .....	10
4 ま と め .....	10
第Ⅶ章 ま と め .....	12
1 縄文時代草創期石器群の出土状況について .....	12
2 縄文時代草創期の石器について .....	13
引用・参考文献 .....	17
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	4トレンチ拡張区の土層断面（一部）	11
第2図	4トレンチ拡張区基本土層断面における火山ガラス比ダイヤグラム	11
第3図	4トレンチ拡張区石器出土地点における火山ガラス比ダイヤグラム	11
第4図	新潟県における後期旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の石斧分布図と出土石斧類似資料	16

## 表目次

第1表	4トレンチ拡張区基本土層断面における火山ガラス比分析結果	11
第2表	4トレンチ拡張区石器出土地点における火山ガラス比分析結果	11
第3表	4トレンチ拡張区石器出土地点における屈折率測定結果	11
第4表	新潟県における後期旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の石斧出土遺跡一覧表	15

## 別表目次

別表1	愛宕澤遺跡石器・礫属性表	19
別表2	愛宕澤遺跡縄文土器観察表	19
別表3	愛宕澤遺跡古代・中世土器観察表	19

## 図版目次

図版 1	周辺の地形と旧石器・縄文時代の遺跡（1/50,000）・愛宕澤遺跡と周辺の遺跡（1/5,000）
図版 2	新津丘陵周辺地形分類図（1/150,000）
図版 3	愛宕澤遺跡確認調査区（1/1,250）
図版 4	愛宕澤遺跡4トレンチ拡張区遺物分布図・土層断面図（1/40）
図版 5	出土遺物1（局部磨製石斧）
図版 6	出土遺物2（打製石斧・不明石斧）
図版 7	出土遺物3（打製石斧・不明石斧）
図版 8	出土遺物4（石核）
図版 9	出土遺物5（礫器・敲石・パステル形石製品）
図版 10	出土遺物6（縄文土器・土師器・須恵器・珠洲焼）

## 写真図版目次

写真図版 1	4トレンチ拡張区ブロック1出土状況
写真図版 2	基本土層と石器出土状況
写真図版 3	調査地現況、調査風景、2.3・4・A、Bトレンチ完掘状況、4トレンチ拡張区遺物出土状況
写真図版 4	4トレンチ拡張区遺物出土状況、4トレンチ拡張区完掘状況
写真図版 5	石器
写真図版 6	石器・礫・縄文土器、古代・中世土器

## 第 I 章 発掘調査に至る経緯

平成10年8月、新津市草水町2丁目地区における市街化調整区域編入に伴う大規模開発の計画が、新潟県教育庁文化行政課（以下、県文化行政課）から通知された平成10年8月4日付教文第442号「第4回新潟都市計画市街化区域及び市街化調整区域全体見直しにおける都市計画化案について（通知）」を通じて新津市教育委員会生涯学習課（以下、市生涯学習課）に知らされた。6月2日に民間事業者と協議を行い、事業内容を確認した。内容は開発面積6.9haで、宅地造成を行う予定である。平成11年度に市街化調整区域編入が決定したらすぐに工事に着手したい。工事計画等を作成したいので、早急に確認調査を実施してほしいという内容であった。市生涯学習課では当該地が周知の遺跡である「草水町2丁目窯跡」を一部含む隣接地であることから、確認調査の必要性がある旨説明し、稲刈り後については他事業で手一杯のため、それ以前なら可能であることと対象面積が多い為、今年度での試掘調査終了は不能と回答した。

平成10年8月31日付で民間事業者より試掘調査の依頼文および地権者の同意書を受けて、協議結果をもとに平成10年10月1日付教生第699号で文化財保護法第98条の2第1項の規定による、「埋蔵文化財発掘調査の報告」を新津市教育委員会教育長から新潟県文化行政課長に提出し、9月2日～10月9日に確認調査を実施した。確認調査結果は平成10年10月19日付教生第700号で新潟県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の終了報告」として提出し、合わせて新発見地点は「草水町2丁目窯跡」遺跡範囲が拡大された。確認調査は隣接する草水町2丁目窯跡で確認された須恵器・土師器窯の探索を主な目的として丘陵裾部に平行するトレンチを設定し、窯跡探索を主目的とした調査方法を用いた。その結果、開発予定地内の一部に出土が予想されなかった縄文時代草創期前半のブロック1か所と草水町2丁目窯跡に隣接する場所で古代土器が包含層中から確認された。丘陵頂部の調査は調査期間の制限から平成11年度以降となった。

その後、民間事業者の変更等から平成12年11月に再度協議を行いその結果に基づいて、平成13年7月27日に確認調査の依頼文が民間事業者から提出された。平成13年8月30日付教生第370号で文化財保護法第58条の2第1項の規定による、「埋蔵文化財発掘調査の報告」を新津市教育委員会教育長から新潟県教育委員会教育長に提出し、8月31日～9月17日に確認調査を実施した。確認調査面積は583.8㎡である。確認調査結果は平成13年10月3日付教生第370-3号で新潟県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の終了報告」として提出した。確認調査の結果、尾根筋には遺構・遺物はほとんど確認することができなかった。

その結果を受けて、民間事業者と市生涯学習課の2者で協議を行い、開発によって掘削が行われる場合には本調査が必要であることで合意した。その後、事業計画が遅滞しており遺跡は現況保存されている。

また、遺跡名は「草水町2丁目窯跡」の範囲拡大として遺跡認定された経緯があるが、新発見の地点は解析された谷に挟まれた別尾根にあたり、遺跡内容も縄文時代草創期を主とした遺跡であることから遺跡名の変更を行った。現在は草水町2丁目地内であるが旧小字名が「愛宕澤<sup>あたござわ</sup>」とされることから「愛宕澤遺跡」と命名し、平成15年3月3日付け教生第558号で「周知の遺跡の範囲・名称変更について（通知）」を提出し遺跡名の変更を行った。県文化行政課長から新津市教育委員会教育長あてに「遺跡の周知について（通知）」が平成15年3月7日付教文第1250号で通知され、「愛宕澤遺跡」は新潟県教育委員会の遺跡台帳・埋蔵文化財包蔵地カード及び市町村別遺跡分布地図に登録された。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境 (図版1・2)

新津市は越後平野のほぼ中央に位置し、新津丘陵を中心として東に阿賀野川、西に信濃川が北流する。享保年間には加治川が阿賀野川に、阿賀野川が新潟港で信濃川に合流する状況で、度々水害に見舞われていたため、享保15年(1730)に新発田藩が松ヶ崎放水路を開削し、現阿賀野川の河口となった。新津市域では下新付近で、五泉市域を北流してきた早出川が阿賀野川に合流し、現阿賀野川の河口となった。また、七日町付近では阿賀野川から分岐した小阿賀野川が西流し覚路津付近で信濃川に合流する。新津丘陵東縁を北流する能代川は太平洋戦争後に水害対策の河川改修が行われた。これにより村松町千原～新津市大関間の蛇行部分が直線化、新津市街地を貫流していた本来の流路から分流が東方に作られ、現在新津川・能代川となっている。この能代川と新津川は下興野町付近で再び合流し、荻島付近で小阿賀野川に注いでいる。

新津市域の地形は丘陵とその縁辺の段丘、沖積地から成っている。南南西～北北東に走る新津丘陵は加茂川を南限に標高278mの高立山が最も高く、北に行くに従い標高を下げて北端で70～80mとなり、その周囲には段丘が標高10～70m間に4段見られる。沖積地は信濃川・阿賀野川の二大河川により形成され、自然堤防や旧河道・後背湿地・三角州などの地形が見られる。阿賀野川が流路を東遷させてきた結果、新津市域では新津丘陵北端～小阿賀野川間に自然堤防が形成され、現在起伏の極少ない微高地として断続的に存在している。遺跡は能代川左岸の標高15m前後の丘陵上に位置する。

### 2 周辺の遺跡 (図版1・2)

時代別の遺跡の分布は旧石器・縄文・弥生時代では丘陵・段丘上に集中し、古墳時代には丘陵や段丘の縁辺部や平野部微高地、奈良・平安時代になるとさらに平野部微高地に分布が見られるようになる。具体的には古代までは丘陵上に弥生後期の環壕集落・円墳などが展開し、丘陵裾部には奈良・平安時代の製鉄・須恵器(土師器)窯などの生産遺跡が集中している。

**旧石器時代の遺跡** 当該期の遺跡は、風化火山灰層(ローム層)を上部に含む矢代田層・蒲ヶ沢層により形成された新津丘陵周辺に分布する。八幡山遺跡第3次調査や愛宕澤遺跡に隣接する草水町2丁目窯跡でナイフ形石器・石刃などが散発的に出土している。

**縄文時代の遺跡** 市内で20遺跡が確認されている。時期としては中期～後期が主体で、標高10～30mの丘陵上・段丘上に立地するものが多い。代表的な遺跡としては、原遺跡が市内最大規模の縄文時代遺跡とされ、そのほか平遺跡(中～晩期)・秋葉遺跡(中～後期)が比較的大規模な遺跡である。

**愛宕澤遺跡** [本書]では1998年度の調査で市内ではほとんど確認されない縄文時代草創期前半の石器(局部磨製石斧・石核等)が検出された。近隣では八幡山遺跡から縄文時代草創期の尖頭器が1点出土している程度で、該期の遺跡は確認されていない。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 確認調査の方法 (図版3・4)

#### A 調査方法

現況は山林・荒地である、対象面積69,000㎡におよぶ広大な丘陵地であるため、確認調査は2か年に分けて調査を行った。平成10年度は隣接する草水町2丁目窯跡から検出された須恵器・土師器窯跡確認を想定し、丘陵の裾部分には直行するトレンチを比較的平坦な部分には平行するトレンチを任意に設定した。平成13年度は丘陵頂部の鞍部に平行するトレンチを任意に設定し、旧石器・縄文時代の遺構・遺物や古代の祭祀遺跡等を想定し確認を行った。トレンチの幅は0.5～1m前後とし、限られた期間内で調査対象面積を広範囲にカバーする方法を用いた。トレンチ番号は任意に平成10年度は1～16トレンチ(以下、Tと略記)、平成13年度はA～CTとし、合計19トレンチを設けた。

調査はバックホー(0、7級)と作業員10～15名体制で実施した。バックホーを一部の平坦地で用いたが、基本的には作業員で表土から掘削を行い、風化火山灰層(ローム層)で精査し遺構・遺物の有無を確認し土層柱状図・遺構略測図を作成し、写真撮影を行った。写真撮影は35mm版、6×7版のカメラを用い、白黒フィルム、カラーポジフィルムを適宜併用した。トレンチ位置図は測量会社に委託してトータルステーションを用いて作成した。

4T拡張区については、4T精査時に2点の縄文時代草創期の石斧を検出し、その周辺を拡張して調査を行った。遺物出土状況を平板測量により図化した。

グリッドの設定は特別に行っていないが、4T拡張区にある任意の2点の座標は、A杭(日本測地系 X座標:197752.529 Y座標:57245.868 世界測地系 X座標:198102.0277 Y座標:56964.0169 緯度:37°47′00″59327、経度:139°08′48″18428)、B杭(日本測地系 X座標:197745.926 Y座標:57241.086 世界測地系 X座標:198095.4245 Y座標:56959.2349 緯度:37°47′00″38016、経度:139°08′47″98698)である。

#### B 調査経過

平成10年度は8月31日から諸準備を開始し、2日に器材搬入、草刈を開始し、一部発掘を始めた。7日に4T拡張区から縄文時代草創期の石斧を検出する。14日に4T拡張区を設定し、発掘を開始する。28日にはほぼ完掘し、写真撮影および平板測量での遺物出土状況の記録作成をおこなう。29日から埋め戻しを行い10月9日で機材撤収を行った。なお、4T拡張区には発掘限界面上に川砂を約30cm入れ、調査面を保護した。最終的な発掘調査面積は、1109㎡である。

平成13年度は8月31日から諸準備を開始し、BT、AT、CTの順に発掘を行った。9月17日までに埋め戻し、機材撤収を行い終了した。最終的な発掘調査面積は、583.8㎡である。2か年の合計面積は1692.8㎡である。

#### C 調査体制

【平成10年度】確認調査

調査主体 新津市教育委員会(教育長 中村 博)

担 当 渡邊朋和（生涯学習課主査）  
調 査 員 立木宏明（生涯学習課主事）  
事 務 局 酒井峰雄（生涯学習課長）・森山則夫（同課長補佐）・中野勇作（同課長補佐）・荒木政幸（同係長）・  
柏木麻子（同主任）・阿達哲二（同技士）

【平成13年度】確認調査

調 査 主 体 新津市教育委員会（教育長 松井 弘）  
担 当 立木宏明（生涯学習課主査）  
調 査 員 野水見子（生涯学習課嘱託）  
事 務 局 石崎義郎（生涯学習課長）・目黒 正（同課長補佐）・荒木政幸（同係長）・田中茂夫（同主任）・  
渡邊朋和（同主査）・阿達哲二（同技士）・高野裕子（同嘱託）・佐野博子（同嘱託）

【平成15年度】整理作業・報告書の刊行

調 査 主 体 新津市教育委員会（教育長 松井 弘）  
担 当 立木宏明（生涯学習課主査）  
調 査 員 澤野慶子（生涯学習課嘱託）  
事 務 局 羽生隆夫（生涯学習課長）・目黒 正（同課長補佐）・荒木政幸（同係長）・田中茂夫（同主任）・  
渡邊朋和（同主任）・阿達哲二（同技士）・高野裕子（同嘱託）・白井利夫（同嘱託）

### 3 整理作業

#### A 整理方法

##### 1) 遺構・遺物

平成15年度に整理作業を行った。遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして10箱である。縄文時代草創期の石器、古代・中世の土器などである。遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③接合。④報告書掲載遺物の抽出。⑤実測図作成。観察表作成。⑥トレース図作成。⑦版下作成。

トレースは調査担当・整理補助員が原寸で作成し、整理補助員が2倍図版を基本に版下作成を行った。図版3のみ測量会社作成の原図を用いた。



## 第Ⅳ章 遺 跡

### 1 遺跡の概要

愛宕澤遺跡では縄文時代草創期と古代・中世の遺物が出土しているが、まとまった資料は縄文時代草創期と古代である。遺物量は遺物収納コンテナ（内径54.5×38.6×10.0cm）で10箱である。

前述したように確認調査という性格上、0.5～1.0mの幅のトレンチを19か所設定し調査を行った。そのうち古代の土器は2・3・14BTの包含層から出土したが遺構等は確認されていない。特筆されるのは4T拡張区から出土した縄文時代草創期の石器集中地点である。将来、予想される本発掘調査範囲は4T拡張区周辺に設定していることから、以下層序・遺構についてはこの区を中心に記述する。

### 2 層 序（図版3・4）

愛宕澤遺跡4T拡張区の基本層序は調査区全体には対応しない。平成13年度に確認調査を行った尾根筋のA～CTでは層厚0.2～0.3cmである。4T拡張区の基本層序は6層に分けられる。以下に基本層序を記す。

I層 黒褐色土（7.5YR 3 / 2）粘性なし、しまりなし。表土（腐植土層）。

II層 灰褐色土（7.5YR 4 / 2）粘性ややあり、しまりややあり。炭化物が少量入る。

III層 黒褐色土（10YR 3 / 2）粘性あり、しまりあり。小礫が入る。

IV層 灰黒褐色土（10YR 4 / 2）粘性あり、しまりあり。縄文時代草創期包含層。

V層 におい黄褐色土（10YR 5 / 4）粘性強い、しまりあり。風化火山灰層（陸成ローム層）。浅間草津軽石（As-K、約1.3～1.4万年前）を上層に包含する。

VI層 におい黄褐色土（10YR 6 / 4）粘性強い、しまり強い。風化火山灰層（水成ローム層）、マーブル状に灰色粘土が入る。

III層からは縄文土器が出土している。隣接する2・3TからはI～III層で古代の土器も出土している。縄文土器は、3点ともに断片である（本報告第V章参照）。土器はIV層以下からは発見されない。

縄文時代草創期の遺物はいずれも主にIV層から出土している。III層からの出土もあるが何らかの要因による浮き上がりと考えられる。縄文時代草創期石器資料はIV層とV層の層境より上のIV層中に包含され、V層上面から確認された浅間草津黄色軽石「As-K」（本報告第VI章参照）降灰以降の石器であることが確認された。大形の遺物はIV層中にあり、ここが縄文時代草創期の生活面であると判断した。

V層以下には遺物の出土はない。V層は陸成の、VI層は水成の風化火山灰層である。基盤までの確認を行っていないがVI層以下は水成層になると考えられる。

また、始良Tn火山灰（AT）も各層から混在する形で検出（本報告第VI章参照）されているが、おそらくVI層以下の層に本来の層位があると考えられる。

### 3 遺構各説 (図版4、写真図版1～4)

遺構として捉えられるものは、4 T拡張区から確認された縄文時代草創期の石器集中地点（以下ブロック）である。4 T拡張区は約36㎡（8×4.5m）の範囲にある。そのうち、約5mほどの範囲から石器が集中して検出されており、周辺に散在する部分も含めて、今回は便宜的にブロック1として報告する。今回提示した平・断面図（図版4）は取り上げ時のものである。土層断面図に取上げ遺物の地点をプロットを試みたが斜面地であることから、出土土層に直に対比不可能なため、出土遺物垂直分布図は別に作成した。このうち土器3点（13～15）およびパステル形石製品1点（12）は後述する遺物の形態学的な見地とⅢ層からの出土であることから除外した。その他に調査区北西に石油採掘用の桶が出土している。近隣に石油採掘坑が存在した可能性がある。

また、確認調査という性格上、Ⅴ層上面（一部Ⅳ層下面）で発掘調査を一端打ち切り、川砂で埋め戻している。小土坑など遺構の可能性のあるものもあったが、完掘を行っていない。

#### A 縄文時代草創期の遺構

##### 1) ブロック1

石器は個体数で局部磨製石斧2点、打製石斧2点、不明石斧2点、石核1点、礫器2点、敲石3点の計12点と礫1点で構成される。石斧6点と石核1点、礫器1点はⅣ層出土で、礫器1点、敲石2点、礫1点はⅢ層出土である。後者は層位的に除外される可能性もあるが、該期の石器群に含まれることも考慮に入れて含めてある。剥片・碎片類は発見されていない。

ブロックを構成する石器のうち、石斧（1・3・5・6）と石核（7）、敲石（10・12）が3m前後の比較的遺物が集中する地点である。1の石斧は刃部を北に向け<sup>注1</sup>A面を表にしている。3の石斧は2点に破損している。0.5m程度の距離で離れたものが接合した。3の基部はA面を上、3の刃部もA面を上にし、刃部は西に向け出土した。7の石核はC面を上に出土した。5の石斧は2点に破損している。0.5m程度の距離で離れたものが接合した。5の基部は側面を上、5の刃部はA面を上にして出土した。6の石斧は基部のみの出土でA面を表にしている。10・12は敲石である。出土箇所での表裏は不明である。

4は石斧基部である若干離れた地点に単独で出土した。A面を表に出土している。2は石斧刃部片である。刃部をやや下にして斜め方向に突き刺さった状況で出土している。その近くに11の礫器が出土している。8の礫器は比較的離れた場所に単独で出土している。刃部を北西に向けている。その他に礫が1点単独で出土している。

前述したように完掘を行っていないので、遺構等は不明である。

---

注1 石器を復元配置した出土状況写真に一部誤りがある。石斧（1）を盗難防止のため持ち帰り、写真撮影時に再配置した際に、誤再配置している。写真図版2上の刃部が北西を向いた写真が正しい位置である。その他の出土状況写真（刃部が南東向き）は誤りである。

## 第V章 遺物

愛宕澤遺跡からの遺物出土総量はコンテナ（内径54.5×33.6×10cm）に10箱である。遺物の内容は縄文時代関連遺物が2箱、古代・中世の土器が2箱、近世以降の遺物6箱である。

### 1 縄文時代草創期の遺物（図版5～9、写真図版5・6）

縄文時代草創期の石器は、個体数で局部磨製石斧2点、打製石斧2点、不明石斧2点、石核1点、礫器2点、敲石3点の計12点である。その他に礫1点（取上No9）が出土している。

1は珪質凝灰岩製の局部磨製石斧である。先端を欠損するがA面の下端の一部とB面の下端に擦痕が残り局部磨製石斧と認定できる。刃部はA面側からの力によって古く欠損している。素材面をA面の器体中央部に残し、礫あるいは礫素材の剥片を素材としている。器体を覆う調整は大きく2段階に分かれ、1段階として器体中央まで覆う粗い調整と周縁を成形する細調整に分かれる。刃部はB面の擦痕が剥離痕を切っていることから、調整の後に刃部研磨が行われたことが窺われる。刃部はおそらく片刃の形態である。最終的な平面形はA面側から見て刃部から基部にかけて若干右に傾く形態を示している。断面形は刃部側が両凸レンズ状で基部側がB面側が平坦な台形状である。

2は珪質凝灰岩製の局部磨製石斧である。B面の刃部側に擦痕が残り、局部磨製石斧であると確認できる。素材は不明である。古く欠損し、刃部側のみ残る。欠損部分はA面側からB面側にかけて大きなヒンジフラクチャーが残る。器体の厚みが20mm弱で1に比べて薄手である。調整は器体全体を覆い、1と同じく粗い平坦剥離の後、比較的細かい調整を行っている。刃部は片刃平鑿形である。B面の刃部側に研磨痕を切る剥離が残り、刃部再生の痕跡を示すと考えられる。断面形は両凸レンズ状である。

3は緑色凝灰岩製の打製石斧である。石材の粒子が粗く一部剥落がある。刃部の一部を欠損しているがそれを除くと完形に近い形状である。全体に剥離痕が残り、素材は不明である。研磨された痕跡は確認できなかったため、打製石斧と認定した。器体中央でA面からB面にかけての力で古く欠損している。器体を覆う調整はB面側がより平坦な剥離が施されている。両側縁は細調整により平行にしている。刃部は片刃平鑿形である。断面形は両凸レンズ状である。

4は珪質凝灰岩製の石斧基部である。刃部が欠損しているため、刃部研磨の有無は不明である。A面からB面にかけて力が加わっている。A面基部端に礫面を残し、B面の刃部側からの剥離が素材の主要剥離面が残ることから礫素材剥片を利用していると考えられる。B面は細調整が器体中軸を覆い平坦を意識している。断面形は中央部で略三角形状、基部側で台形状である。

5は粗粒の緑色凝灰岩を石材とした打製石斧である。長さが195mmで完形に復元できる。全体に風化が著しく、剥離面および切り合い関係も不明瞭である。剥離面の方向は推定も含む。素材は不明である。刃部には研磨痕が現状では確認できず打製石斧に分類した。器体はほぼ中央で、A面からB面にかけての力で欠損している、その結果B面側にヒンジフラクチャーを残す。両側縁は平行に揃えられている。刃部は両刃蛤刃形である。断面形は両凸レンズ状である。

6は珪質頁岩製の石斧基部である。4と同じく刃部が欠損しているため、刃部研磨の有無は不明である。器体中央より基部に近い位置でA面からB面にかけての力で欠損している。基部端に礫面を残し、礫あるいは

は礫素材の剥片を素材としている。剥離は2段階におよび、粗い平坦剥離の後、階段状の周縁調整が行われている。A面の器面上には稜上からA面左測縁にかけての剥離痕が残る。断面形は両凸レンズ状である。

7は玉髓製の石核である。多角形状の石核で大部分をマープル状の節理面と礫面に覆われている。一見、石刃石核に類似するが、ほとんど剥片が作出されていない。B面に残るE面からの剥離痕が最終剥離痕である。それ以前にC面を打面とした大きな剥離痕残り、ほぼ90度の打面転位を行っている。この石核を素材とした剥片類は調査では出土していない。

8は珪質凝灰岩製の礫器である。A・B面に大きく礫面を残し、礫を素材としていることが明瞭である。刃部は下縁からの粗い交互剥離によって作出されている。

9は楕円形の安山岩自然礫を素材とした敲石である。両端部と側縁に敲き痕が残る。

10は卵形の安山岩礫を素材とした敲石である。両端部に敲き痕が残る。

11は方形のチャート礫を用いた礫器である。端部に交互剥離した刃部がある。

12は三角形の安山岩製の自然礫を素材とした敲石である。端部の一部に敲き痕が残る。

## 2 その他の縄文時代の遺物 (図版9・10、写真図版6)

前述したようにパステル形石製品1点と土器3点は縄文時代草創期から除外した。

13のパステル形石製品は白色の滑石製である。端部に研磨痕があり鉛筆状に尖っている。断面形は楕円形である。パステル形石製品は縄文時代前期から近・現代まで利用されている〔藤田1991〕。この出土品がⅢ層出土であることと、他の縄文時代草創期遺跡からの出土例が知られていないことを根拠に縄文時代前期以降の遺物として取り扱った。

14～16は縄文土器である。LRの斜縄文が観察される。14は器厚が7.3mm前後の深鉢体部である。器面が15は器厚が7.5mm前後の深鉢体部である。器面が荒れており文様等は観察できない。若干の凹凸から縄文が施文されていた可能性がある。16は器厚が8mm前後の深鉢体部である。表面は新しい剥落により器面半分が欠損しているがLRの斜縄文が観察される。3点ともに繊維等の混入は観察されない。縄文時代草創期～早期の回転縄文土器とも胎土の特徴が異なり、時期的には縄文時代前期以降の可能性が高い。

## 3 古代・中世の遺物 (図版10、写真図版6)

遺跡全体で確認された古代・中世の土器は、2Tで土師器無台椀7点・長甕17点、3Tで土師器無台椀10点・長甕17点・小甕5点、11Tで土師器長甕1点、14Tで土師器無台椀6点・珠洲焼甕1点、BTで土師器無台椀7点・小甕9点、表採遺物須恵器大甕1点である。全て、包含層から出土している。この内、13点を図化した。17・18・22・24・26は土師器無台椀である。22は口縁端部が外反する。底部はいずれも糸切り無調整である。19・20・21・23は土師器長甕である。20は口縁端部を上方に摘み上げている。23は体部外面にカキ目を施す。27・28は土師器小甕である。27は底部破片、28は体部破片である。29は須恵器大甕の体部破片である。25は珠洲焼甕の体部破片である。小破片のため年代の特定は出来なかった。古代の土器の年代は指標となる須恵器無台杯が出土していないため詳細は不明であるが、概ね9世紀代であると考えられる。

## 第Ⅵ章 愛宕澤遺跡の火山灰分析

早田 勉（古環境研究所）

### 1 はじめに

新津市域に分布する後期更新世以降に形成された地層中には、浅間火山をはじめとする多くの火山に由来するテフラ（火山<sup>いざつち</sup>砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な石斧が検出された愛宕澤遺跡において、火山ガラス比分析と屈折率測定により指標テフラの検出同定を行って、石斧の年代に関する資料を収集することになった。

### 2 火山ガラス比分析

#### A 分析試料と分析方法

火山ガラス比分析の対象となった試料は、発掘調査担当者により4 T 拡張区基本土層断面から採取された9点、それに4 T 拡張区石器出土地点から採取された5点の合計14点である。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15 g を秤量。
- 2) 超洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1 / 4 - 1 / 8 mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める。

#### B 分析結果

4 T 拡張区基本土層断面における火山ガラス比分析結果を、ダイヤグラムにして図2に、その内訳を表1に示す。分析の結果、いずれの試料からも、透明な分厚い中間型ガラスや軽石型ガラスが検出された。またⅥ-9、Ⅴ-7、Ⅳ-4をのぞく全試料から、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが検出された。さらに、Ⅵ-8、Ⅲ-3、Ⅲ-2からは、基盤の地層に由来すると思われる海綿骨針が検出された。

4 トレンチ拡張区石器出土地点における火山ガラス比分析結果を、ダイヤグラムにして図3に、その内訳を表2に示す。分析の結果、いずれの試料からも、透明な分厚い中間型ガラスや軽石型ガラスが検出された。またⅢ-10をのぞく全試料から、透明なバブル型ガラスが検出された。さらに、試料13からは海綿骨針が検出された。

### 3 屈折率測定

#### A 測定試料と測定方法

火山ガラス比分析の対象となった試料のうち、石器の直下にあるV-12および取上No 2（図版5-1）石器の下位のV上層の試料14を対象にテフラの起源を明らかにするために、屈折率測定を行うことにした。測定方法は、温度一定型屈折率測定法〔新井, 1972, 1993〕による。

#### B 測定結果

屈折率測定の結果を表3に示す。V-12には、重鉱物として角閃石、斜方輝石、カンラン石がごくわずかに含まれている。火山ガラス（n）と斜方輝石（ $\gamma$ ）の屈折率は、各々1.500-1.504および1.708-1.711である。試料番号14にも、重鉱物として角閃石、斜方輝石、カンラン石がごくわずかに含まれている。火山ガラス（n）と斜方輝石（ $\gamma$ ）の屈折率は、各々1.501-1.503および1.707-1.711である。これのことから、いずれの試料にも、約1.3-1.4万年前\*1に浅間火山から噴出した浅間草津軽石（As-K, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）が含まれていると考えられる。したがって、石斧の出土層位はAs-Kの上位と考えられる。なお、火山ガラス比分析により、ごくわずかに検出された透明なバブル型ガラスは、その特徴から約2.4-2.5万年前\*1に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰〔AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995〕に由来する可能性が考えられる。

### 4 ま と め

愛宕澤遺跡において、火山ガラス比分析と屈折率測定を行った。その結果、浅間草津軽石（As-K, 約1.3-1.4万年前\*1）に由来するテフラ粒子などを検出することができた。石斧はこのテフラ粒子が混在する土層中から検出されている。

\*1：放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代

#### 文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要，自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

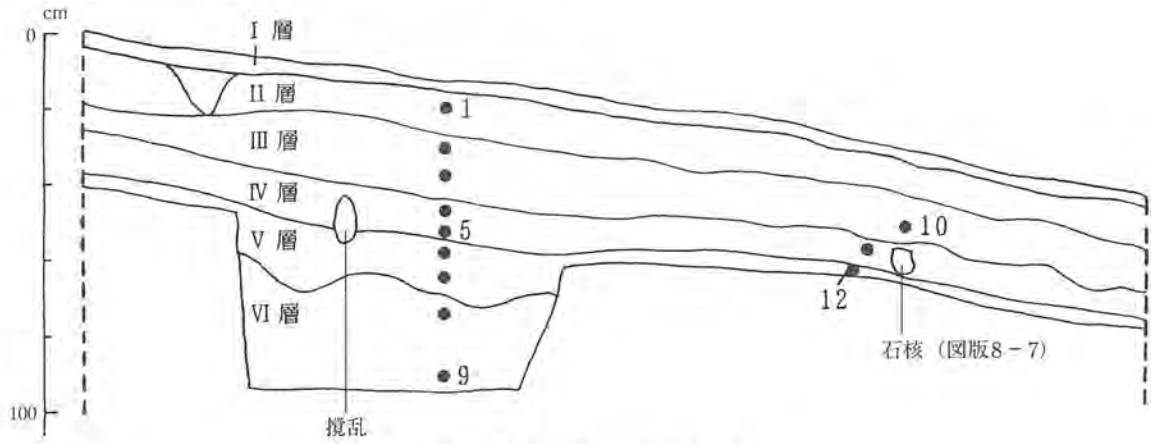
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」，p.138-149.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器 $^{14}\text{C}$ 年代．第四紀研究，34，p.377-379.

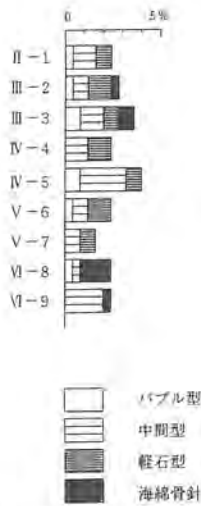
町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—．科学，46，p.339-347.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

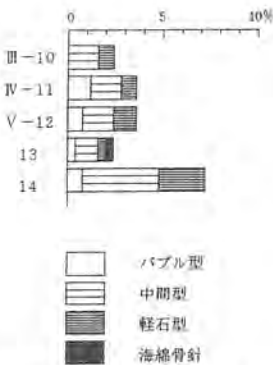
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良Tn火山灰（AT）の $^{14}\text{C}$ 年代．第四紀研究，26，p.79-83.



第1図 4 T 拡張区の土層断面 (一部)  
●数字はテラフ分析の試料番号



第2図 4 T 拡張区基本土層断面における火山ガラス比  
ダイヤグラム



第3図 4 T 拡張区石器出土地点における火山ガラス比  
ダイヤグラム

第1表 4 T 拡張区基本土層断面における  
火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	ps	海綿骨針	その他	合計
II-1	1	3	2	0	244	250
III-2	1	2	3	1	243	250
III-3	2	3	2	2	241	250
IV-4	0	3	3	0	244	250
IV-5	2	6	2	0	240	250
V-6	1	2	3	0	244	250
V-7	0	2	2	0	246	250
VI-8	1	1	0	4	244	250
VI-9	0	5	1	0	244	250

数字は粒子数。bw: バブル型, md: 中間型, ps: 軽石型。

第2表 4 T 拡張区石器出土地点における  
火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	ps	海綿骨針	その他	合計
III-10	0	4	2	0	244	250
IV-11	3	4	2	0	241	250
V-12	2	4	3	0	241	250
13	1	3	1	1	244	250
14	2	10	6	0	232	250

数字は粒子数。bw: バブル型, md: 中間型, ps: 軽石型。

第3表 4 T 拡張区石器出土地点における  
屈折率測定結果

試料	重結物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
V-12	(ho, opx, ol)	1.500-1.504	1.708-1.711
14	(ho, opx, ol)	1.501-1.503	1.707-1.711

ol: カシラン石, opx: 斜方輝石, ho: 角閃石, 屈折率の測定は、位相差法 (新井, 1972, 1993) による。

## 第Ⅶ章 ま と め

### 1 縄文時代草創期石器群の出土状況について

**出土状況の層位的検討** 愛宕澤遺跡の4 T 拡張区からは、丘陵端部の緩斜面5 m前後の範囲に局部磨製石斧2点、打製石斧2点、不明石斧（石斧基部）2点、石核1点、礫器2点、敲石3点、礫1点の13点が集中して検出された。それらの出土層位はⅣ層下面で、黒～茶色土と風化火山灰層（ローム層）の間の漸移帯にあたる。火山灰分析の結果からA s - KがⅤ層上面にあり石器群はその上層から出土していることが確認された。新潟県北部から中部にかけての旧石器時代終末から縄文時代草創期の出土層位を確認すると、ガラハギ遺跡A地点〔立木他1997〕、荒沢遺跡A地区〔小熊他1994〕などの尖頭器・搔器を含む石器群の出土層位もA s - K降下以降の漸移帯からの出土である。樽口遺跡A-MS、A-MH文化層〔立木他1996〕の細石刃に尖頭器が含まれる石器群ではA s - K直下の層位から出土している。層厚にして20cm前後の場合が多く、その中での層位的・時期的な分離は難しい。しかし、それ以前に位置づけられる可能性をもつ、荒屋遺跡〔芹沢・須藤他2003〕などの細石刃石器群がA s - K降下前後の層位（風化火山灰層）に含まれることを考えると、この地域での層位的には一定の目安が与えられる。佐野勝宏氏がまとめたように〔佐野2002〕、群馬県および新潟県北部・中部地域を含めてA s - Kを境界に尖頭器を主体とする石器群が上位の層位に含まれ、A s - K降下層位および下位の層位からは尖頭器および細石刃が含まれる石器群が出土する傾向がある。愛宕澤遺跡ではA s - K降下以降の層序であることから、時間的な位置付けとして尖頭器を主体とする石器群以降に含まれる可能性が高い。

**出土状況からみた遺跡の性格** 出土状況平面・断面図は図版4に示したとおりであるが、石斧に限定すると全て破損品のみで構成されている。2点の石斧（3・5）が各々40cm程度の間隔を有して接合し略完形となる。完形品がその後の土圧によって破損した可能性も考えられるが、破損面のリング等の観察では2点ともに器体正面からの力が加わって破損しており、横斧〔佐原1977〕として使用によつての破損とみなす方が土圧により破壊され移動したと考えるより自然である。この破損の傾向は他の4点（1・2・4・6）ともに破損部位のずれはあるが共通し、使用法が類似していた可能性が高い。破損の傾向は麻柄一志氏が全国的に集成・分類〔麻柄1988〕している。それによればⅠb類に1と3刃部が、Ⅱa類に2と4基部が、Ⅱb類にⅢ類に3・5基部と4・6が対応する。麻柄分類のⅠa類は完形品であるが全国集成された250点中208点が完形品で全体の82%を占める。愛宕澤遺跡の石斧群は全国的には少数派に属する。また、出土状況で特筆されるのは石斧の再加工を示す調整剥片が1点も出土していない点である。石斧以外の石器形態も含めて剥片類の出土は無い。その他に、利用の痕跡がない初期段階の石核1点と敲石3点と礫器1点が石斧周辺に広がるように分布している。これらの状況はこの地点での限定的な作業内容の一端を表していると考えられる。旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧の集積といえば神子柴遺跡〔藤沢・林1961〕等に代表される完形石斧の集中出土が想起されるが、破損した石斧の出土状況では「デポ」〔田中2001〕とするには躊躇され、むしろ石斧・礫器・敲石の使用に限定された生業の場で、さらには季節的な労働の場であったと考える。具体的には石斧等の機能の考え方によって限定できないが、堤隆氏が提示した後期旧石器時代末から縄文時代草創期初頭の遊動領域と石器交換のモデル〔堤1996〕のうち「シーズンブルキャンプ」に相当しよう。



## 2 縄文時代草創期の石器について

**石器組成の問題** 愛宕澤遺跡の石器組成は前項で扱ったように石斧と礫器、敲石に限定される。観察の結果、全て単独母岩である。層位的には前述したとおり後期旧石器時代終末から縄文時代草創期にあたと考えられるが、尖頭器や搔器などの加工具類が欠落しており、当期の典型的な石器組成の全てを表しているとは考えられない。2点出土した礫器は細石刃石器群以降に利用頻度が多くなる石器である〔堤1997〕。細石刃が出土する荒屋遺跡〔澤田・田海2002、芹沢・須藤他2003〕に存在し、遺跡内での出土量は少ないが細石刃石器群の典型的な石器形態である。ただし、円礫に剥離を加えて刃部を形作る形状のため、時期的な差異は見出し難い。これは敲石にも同様なことがいえる。石斧については形態的な特徴に差異があり、編年を考える上で重要な鍵となる。

**石斧出土の遺跡分布** 愛宕澤遺跡出土の石斧の位置づけを考えるため、新潟県域での旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の石斧について概観する。ここでは旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の遺跡までを対象とし、「神子柴型石斧」〔森嶋1968・1970〕から研磨が大きく進んだ部分磨製石斧とよばれる石器を含めることにした。従来の集成〔佐藤1999 a b・2001、小熊・立木2001〕を参考に最近の事例を加えると、関連の石斧が出土した遺跡は56遺跡（石斧総計194点以上）にも上る（第4表、第4図）。その他の地域について、近年集成されている成果（草創期前半に限定されているものも含む）をみると、北海道で25遺跡〔杉浦1987〕、東北6県で39遺跡〔鈴木・大場・須藤2003〕、栃木県で10遺跡〔芹沢・大関2002〕、群馬県で11例〔中東1994〕、茨城県で15遺跡〔窪田2001〕、千葉県・東京都・静岡県で19遺跡以上〔埼玉県考古学会1986〕、神奈川県で約20遺跡〔旧石器（先土器・岩宿時代）研究プロジェクト1994〕、長野県で15遺跡以上〔森嶋1968〕、北陸4県で4遺跡以上〔麻柄1988〕、東海3県・近畿7県で29遺跡〔奥2002〕、中・四国で12遺跡〔安川2003〕、九州で約30遺跡以上〔九州旧石器文化研究会2000〕など全国でおおよそ、合計285遺跡以上が知られている。その中でも新潟県域が石斧出土遺跡が集中する地域であることは間違いない。

新潟県における分布は第4図に示したとおりで、新潟県中・南部を中心に北部にも分布域が広がり、佐渡にも近年確認されている〔小熊・立木1998〕。信濃川・阿賀野川などの河岸段丘に多く立地し、それ以外の地域でも丘陵沿いを中心に分布している。一部、巻町・分水町・上越市・佐渡など海岸近くの丘陵に分布が広がっている。概ね、県内に143遺跡〔小熊・立木2001〕ある縄文時代草創期遺跡群の分布と対応する関係にある。新潟県北部および上越市近隣の南部など分布が希薄な地域もあるが、特に南部で縄文時代におきた妙高火山群起源の火砕流（大田切川火砕流堆積物）の関係で発掘調査がおよんでいない可能性〔土橋・寺崎他1996〕もあり、隣接する長野県信濃町（野尻湖）周辺に多く出土〔森嶋1968〕することから一該に評価が難しい側面もある。全体として、信濃川上流域段丘上の津南町・中里村を中心とする地域に集中的に出土〔佐藤2001〕する傾向が認められる。

**長野県北部から新潟県南部の石斧の形態と変遷** 旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧については、研究史の初期の段階から変遷論が提出されている。代表例は「神子柴型石斧」を提唱した森嶋稔氏の論考〔森嶋1968・1970〕で、全国的に集成研究を行った岡本東三氏や白石浩之氏の研究〔岡本1979、白石1992〕もある。石斧の形態については、森嶋氏が既に指摘したとおり、幅広のものから狭長なものへ、そして小形化することが指摘されている。この変遷観はその後の出土事例とも概ね整合する。しかし、石器群の個性的な様相もあり、時期的な細分には無理が生じていることが指摘されている〔堤1998など〕。

近年、新潟県を含む中部地方北部では新出資料が増え、一括性の高い石器群が確認されている。石器組成

と土器の伴出関係から大枠での編年は堤氏も認めており、その変遷案を参考に調査事例が多い長野県北部～新潟県南部地域の一括資料での変遷を概観する。唐沢B遺跡〔森嶋他1998〕では土器が伴わず、幅広く大形の石斧と伴に尖頭器、石刃素材の搔器・削器・石刃などが一括して出土している。宮ノ入遺跡〔森嶋1968、大竹2003〕には近年の採集資料も含め6点の細身の局部磨製石斧がある。土器を含め他の遺物は伴出していない。星光山荘B遺跡〔中島2000〕では複数のブロックで隆起線文土器に伴い、細身の尖頭器・有舌尖頭器・搔器・削器・石錐等が出土し、剥片石器素材となる剥片に石刃がみられなくなる。大堀遺跡では表裏縄文土器に伴い撥形の断面形の扁平な全面研磨に近い石斧が出土している。唐沢B遺跡は報告書では旧石器時代終末から縄文時代草創期の初頭に位置づけられている。削片系細石刃石器群との関係〔稲田2000〕や土器の出現との関係が考慮されるが、神子柴遺跡とほぼ同時期と考えられる位置付けには今後の新出資料の出現があっても大きな変動はないと考えられる。宮ノ入遺跡に出土した細身の局部磨製石斧の一群は規格性が高く、森嶋氏は新时期に位置付けている。縄文時代草創期前半の隆起線文系土器が伴う星光山荘B遺跡では細身の局部磨製石斧が主体で宮ノ入遺跡のものと同様で、同時期の所産と考えたい。爪形文系以降の土器群に伴う石器群で石斧が伴う資料が見当たらないが、近隣の福井県浜島貝塚〔田中2002〕では爪形文・多縄文系（押圧）に局部磨製石斧が伴う。多縄文系（回転）には全面研磨の石斧が伴い石斧の形態変遷の上では大きな画期となる。

**新潟県北部の様相と愛宕澤遺跡出土石斧の位置づけ** この変遷を新潟県北部にあてはめると唐沢B遺跡に代表される始源期の段階ははっきり確認できない。前述の荒沢遺跡では石斧が欠落するが、大形の尖頭器に石刃素材の削器などが出土している様相は非常に近いと考える。あるいは樽口遺跡での細石刃とA-M S文化層での尖頭器やA-M S文化層の尖頭器、石刃素材の彫器・彫搔器・搔器・削器などの伴出は、稲田氏の指摘があるように神子柴石器群との並行関係を示唆しているかもしれない。近隣の遺跡では戦前の資料ではあるが薬師平A遺跡（旧村杉遺跡）〔藤森1936・1965、増子2003〕の大形の局部磨製石斧に伴う石刃石核・石刃素材削器・彫器が一括資料であれば候補にのぼると考えられる。愛宕澤遺跡例にみられる細身の石斧形態は、隆起線文系～多縄文系（押圧）が出土する小瀬ヶ沢洞窟に類似し、おそらく同段階の所産と考えられる。この形態の石斧は星光山荘B遺跡例とも非常に良く近似する。爪形文系および多縄文系（押圧）の良好な資料に恵まれないが、多縄文系（回転）は室谷洞窟で一括性の高い資料が出土している。8層から3点、10層から1点、11層から2点、合計6点出土している。谷口康浩氏によると室谷下層式は9層と10層の間に新旧の画期が見出されているが〔谷口1996〕、石斧はいずれも扁平礫に研磨を加えた全面研磨に近い磨製石斧である。おそらく、それ以前に神子柴型石斧は姿を消しているのだろう。第4図にあわせて新潟県北部の該期の石斧を掲載した。多くは単品資料である。山屋遺跡例〔富樫他1997〕や中峯遺跡例〔藤巻他1996〕は旧石器時代終末から縄文時代草創期初頭の青森県大平山元I遺跡〔三宅1979〕の大形石斧に類似する。また、大原遺跡例〔宇佐美1987〕の特徴は宮ノ入遺跡の大形品に共通する。単品資料は一括資料との類似性は指摘できるが、先に述べたように一括性のない資料については時期的に位置付けるのが難しい。また、完形品の出土は状況によっては「デポ」〔田中2001〕と捉えられる可能性もあり今後注意が必要である。

紙面の都合で石斧形態比較の詳細、石材や石斧に伴う石器組成、行動領域の問題、神子柴型石斧の出自の問題などに触れることができなかつた。今後の課題として検討を継続したい。

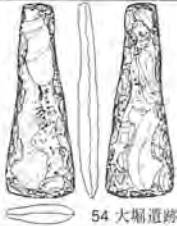

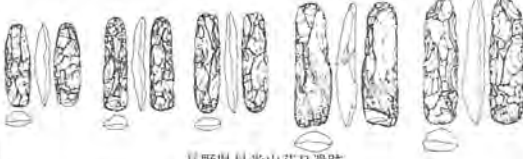

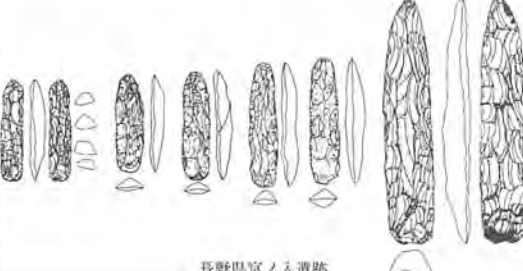


第4表 新潟県における後期旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の石斧出土遺跡一覧表

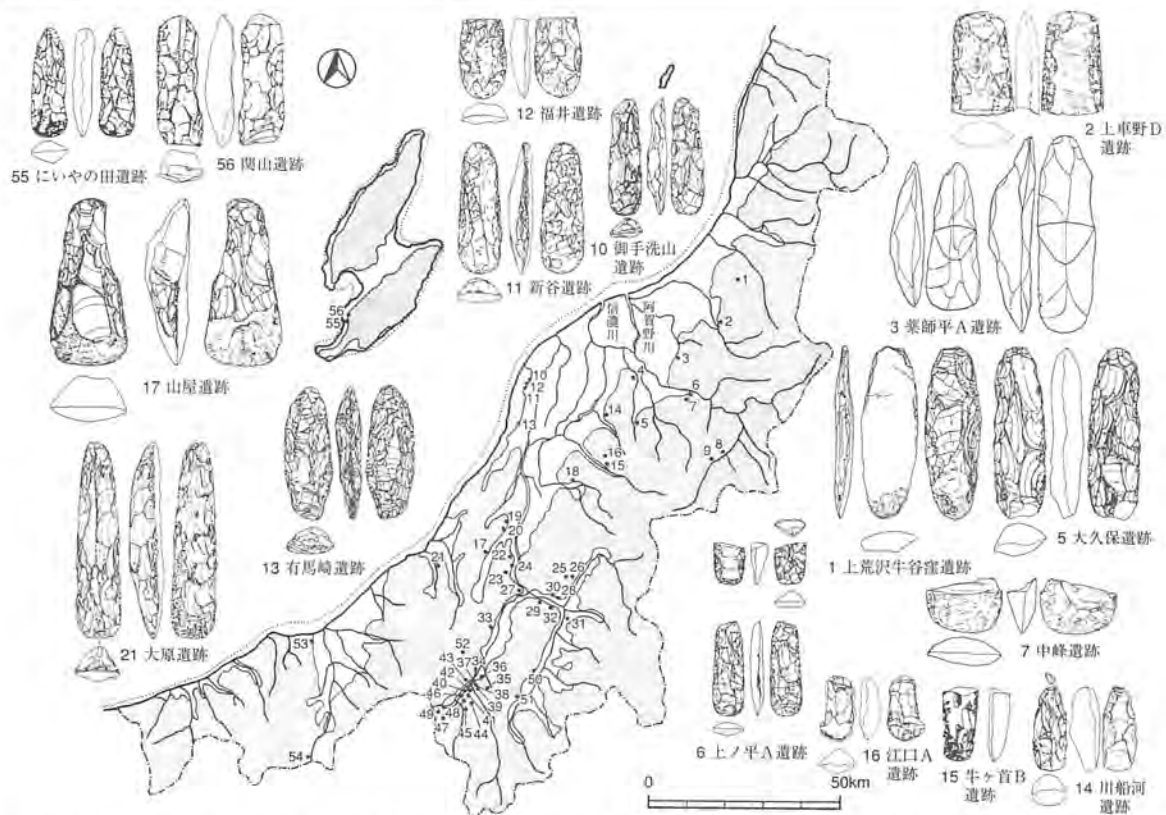
No	長No	遺跡名	所在地	遺物		遺構	発掘調査等	備考	主な文献
				縄文土器	石器				
1		上荒沢半谷窪	新発田市		局部磨製石斧1点		採集		〔小林・河内2002〕
2	10	上車野D	新発田市		尖頭器、局部磨製石斧2点、搔器		採集		〔阿部1993〕
3	13	葉師平A	北蒲原郡笹神村		尖頭器、局部磨製石斧1点、搔器、石核、石刃		採集	旧遺跡名：村杉	〔藤森1937・1965〕〔森嶋1970〕
4	16	愛宕澤	新津市		局部磨製石斧2点、打製石斧2点、不明石斧2点、石核、叩石、礫器	ブロック1か所	新津市教委発掘1998年	旧遺跡名：草水町2丁目築路より分糞	〔本書〕
5	18	大久保	中蒲原郡村松町		局部磨製石斧1点		採集		〔立木2003〕
6	20	上ノ平A	東蒲原郡三川村		尖頭器、局部磨製石斧1点、打製石斧1点		県埋文事業団発掘1992年		〔澤田他1994〕
7	22	中峰	東蒲原郡三川村		局部磨製石斧1点		県埋文事業団発掘1993年		〔藤巻他1996〕
8	24	小瀬ヶ沢洞窟	東蒲原郡上川村	隆起線文系、爪形文系、多縄文系(押圧・回転)他	尖頭器、有舌尖頭器、種刃、棒状尖頭器、石斧84点(局部磨製石斧9点、打製石斧58点、不明石斧17点)石鏃、石鏃、搔器、石匙、磨石、敲石類、石皿、不定形石器、石核、舟底形石器、有孔石製品、骨器、獣骨		長岡市立科学博物館発掘1958・59年	石斧点数は草創期ののみ、小瀬博士氏御教示。一部採集品有り。	〔中村1960〕〔小瀬・前山他1993〕
9	25	室谷洞窟	東蒲原郡上川村	多縄文系(回転)	石鏃、磨製石斧6点、搔器、不定形石器、磨石類、石核、骨製品、獣骨		長岡市立科学博物館発掘1960～62年		〔中村1964〕
10	29	御手洗山	西蒲原郡巻町		打製石斧1点		採集		〔小野1994〕
11	30	新谷	西蒲原郡巻町		局部磨製石斧1点		採集		〔小野1994〕
12	31	福井	西蒲原郡巻町		局部磨製石斧1点		採集		〔小野1994〕
13	32	有馬崎	西蒲原郡分水町		局部磨製石斧1点、石核	ブロック1か所	分水町教委発掘1992年		〔前山1997〕
14	33	川船河	南蒲原郡田上町		打製石斧1点		採集		〔立木2003〕
15	35	牛ヶ首B	南蒲原郡下田町		局部磨製石斧1点		採集		〔新潟県立三条高等学校社会科クラブ考古班1971〕
16	36	江口A	南蒲原郡下田町		局部磨製石斧1点		採集		〔新潟県立三条高等学校社会科クラブ考古班1980〕
17	42	山屋	三島郡越路町		局部磨製石斧1点		採集		〔富樫・小瀬・能澤1997〕
18	44	崎	見附市		不明石斧1点				〔甘粕他1983〕
19	47	森橋蛇新田	長岡市		局部磨製石斧1点		採集		〔小林1960〕〔中村1961・1966・1978〕〔長岡市1992〕
20	48	堤子打場	長岡市		尖頭器、打製石斧1点		採集		〔中村1966・1978〕〔長岡市1992〕
21	49	大原	柏崎市		局部磨製石斧1点		採集		〔山内・佐藤1962〕〔宇佐美1987〕
22	50	三仏生	小千谷市	爪形文系	尖頭器、局部磨製石斧3点、打製石斧2点		長岡市立科博発掘1955年 県埋文事業団発掘1996年		〔中村1957・1961・1978〕〔江口・高橋1999〕
23	52	城之腰	小千谷市		尖頭器・局部磨製石斧1点		県教委発掘1980年		〔藤巻他1991〕
24	57	金塚	小千谷市	爪形文系	局部磨製石斧1点		県埋文事業団1995・96年		〔江口・高橋1999〕
25	58	松ヶ城	北魚沼郡広神村		石鏃、局部磨製石斧1点、打製石斧1点、両面加工石器、石核		広神村教委発掘1990年		〔鈴木1992〕
26		大清水	北魚沼郡広神村		局部磨製石斧2点、不明石斧2点		広神村教委発掘1999年		〔高木2002〕
27	59	西倉	北魚沼郡川口町	爪形文系、多縄文系(押圧・回転)系	有舌尖頭器、局部磨製石斧調整剥片3点、石核	土坑	川口町教委発掘1987年		炭化ケルミ 〔佐藤1988〕
28	61	権現平	北魚沼郡堀ノ内町		尖頭器、搔器、打製石斧1点、石刃	礫群3か所	県教委発掘1980年		〔佐藤1985〕
29	62	上ノ原A	北魚沼郡堀ノ内町		尖頭器、局部磨製石斧2点		採集		〔八木・佐藤1988〕〔佐藤他1995〕
30	63	清水上	北魚沼郡堀ノ内町		局部磨製石斧1点		県埋文事業団発掘1982・90・92年		〔鈴木・寺崎他1996〕
31	66	田川平	北魚沼郡堀ノ内町		局部磨製石斧1点		採集		〔佐藤1995〕
32	67	長者林(台林)	北魚沼郡小出町		局部磨製石斧1点		採集		〔小林1960〕〔中村1961・1966・1978〕
33	69	下平新田	中魚沼郡川西町		打製石斧1点		採集		〔平次1999〕
34	79	久保寺南	中魚沼郡中里村	隆起線文系	尖頭器、局部磨製石斧、打製石斧、搔器、有溝礫石	ブロック複数	中里村教委発掘1999年		〔佐藤・笠井2000〕
35	80	原水無	中魚沼郡中里村		局部磨製石斧2点、打製石斧			別称妙栄寺	〔小林他1983・1985〕
36	81	古城(桂)	中魚沼郡中里村		有舌尖頭器、局部磨製石斧1点				〔菅沼2002〕
37	85	壬	中魚沼郡中里村	無文、隆起線文系、爪形文系、多縄文系、爪形文系、多縄文系(押圧・回転)	石斧27点(局部磨製石斧4点、打製石斧19点、不明石斧4点)石斧素材2点、尖頭器、有舌尖頭器、石鏃、搔器、削器、有溝礫石	ブロック複数	國學院大学考古学発掘1979～82年、86年中里村教委発掘1991年	早・前期の石斧が含まれる可能性有り。一部採集品有り。	〔小林他1980・1981・1983・1987・1992〕〔小林他1985〕
38	86	中林	中魚沼郡中里村		尖頭器、有舌尖頭器、有肩尖頭器、彫器、搔器、局部磨製石斧、石核		東北大学考古学研究室発掘1965年		一部採集品有り。 〔芹沢長介1966〕〔小林他1985〕
39	87	田沢	中魚沼郡中里村	隆起線文系	尖頭器、有舌尖頭器、搔器、打製石斧、石鏃		東北大学考古学研究室発掘1968年		一部採集品有り。 〔芹沢長介・須藤 隆1968〕〔小林他1985〕
40	91	卯ノ木南	中魚沼郡津南町	爪形文系、多縄文系(押圧・回転)他	尖頭器、有舌尖頭器、局部磨製石斧、石鏃削器	ブロック複数、プラスチック状土群	津南町教委発掘1991年		〔星野1992〕
41	98	前畑	中魚沼郡津南町		石刃、局部磨製石斧1点		採集		〔小林他1994〕
42	102	本ノ木	中魚沼郡津南町	多縄文系(押圧)	尖頭器、石鏃、打製石斧1点		芹沢長介発掘1956年山内清男1957年		〔芹沢・中山1957〕〔山内1960〕〔山内・佐藤1962〕〔岡本1979〕〔小林他1984〕
43	103	鳥	中魚沼郡津南町		局部磨製石斧1点、石核		採集		〔広田・中澤1994〕
44	110	猪沢	中魚沼郡津南町		局部磨製石斧1点、尖頭器		採集		〔広田・中澤1994〕
45	115	寺田上A	中魚沼郡津南町	押引	尖頭器、搔器、打製石斧2点		津南町教委発掘1995年		〔佐藤他1998〕
46	118	道下	中魚沼郡津南町	隆起線文系	有舌尖頭器、局部磨製石斧1点、搔器		津南町教委発掘1997年		一部採集品有り。 〔広田・中澤1994〕〔佐藤他1997〕
47	124	上原E	中魚沼郡津南町	隆起線文系	尖頭器、局部磨製石斧		津南町教委発掘2000年		〔佐藤他2000〕〔佐藤2001〕
48		堰下	中魚沼郡津南町	多縄文系(回転)	局部磨製石斧		津南町教委発掘1998年		〔佐藤他1998〕
49		羽波原B	中魚沼郡津南町	隆起線文系	尖頭器、有舌尖頭器、石斧		津南町教委発掘2000年		〔佐藤他2000〕
50	127	金屋	南魚沼郡六日町	隆起線文系	打製石斧1点		県教委発掘1982年		〔鈴木1985〕
51	129	梨ノ木平	南魚沼郡塩沢町		尖頭器、有舌尖頭器、打製石斧		塩沢教委発掘1984年・85年		〔佐藤1987〕
52	133	原	東頸城郡松代町		打製石斧1点		採集		〔高橋1988〕
53	134	山屋敷I	上越市		局部磨製石斧2点、不明石斧1点、尖頭器		上越市教委発掘1978・79年		〔立木2001〕〔上越市2003〕
54	139	大堀	中頸城郡妙高高原町	多縄文系(表裏縄文)	尖頭器、有舌尖頭器、局部磨製石斧1点		県埋文事業団1993～95年		〔土橋・寺崎他1996〕
55	141	にいやの田	佐渡郡真野町		局部磨製石斧1点		採集		〔小瀬・立木1998〕
56	142	関山	佐渡郡真野町		局部磨製石斧1点		採集		〔小瀬・立木1998〕

※長Noは〔小瀬・立木2001〕の遺跡番号に対応する。

※石器点数は石斧のみ本報告済のものに限り記載した。

※土器は遺跡内で出土した草創期土器型式を記載した。石斧との伴出関係は不明なものが多い。

	長野県北部から新潟県南部地域	新潟県北部地域
縄文時代草創期後半	 <p>54 大堀遺跡</p>	 <p>9 室谷河窟</p>
縄文時代草創期前半	 <p>長野県星光山荘B遺跡</p>	 <p>8 小瀬ヶ沢河窟</p>
	 <p>長野県宮ノ入遺跡</p>	 <p>4 愛宕澤遺跡</p>
旧石器時代終末から縄文時代初期	 <p>長野県唐沢B遺跡</p>	(+)



第4図 新潟県における後期旧石器時代終末から縄文時代草創期後半の石斧分布図と出土石斧類似資料（石器S=1/10）

## 引用・参考文献

- ア甘粕 健他 1983 『新潟県史』資料編1 原始・古代一 新潟県  
 阿部朝衛 1993 『新潟県新発田市周辺の旧石器(4)』『北越考古学』第6号 pp.44~70, 北越考古学研究会  
 安斎正人 2003 『旧石器社会の構造変動』 同成社  
 イ稲田孝司 2000 『神子柴石器群と縄文時代のはじまり』『九州の細石器文化Ⅲ—縄文文化への鼓動—』 pp.43~52 九州旧石器文化研究会  
 ウ宇佐美篤美 1987 『大原遺跡』『柏崎市史資料集』考古編1 pp.1, 新潟県柏崎市史編さん委員会  
 工江口友子・高橋 保 1999 『一般国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 金塚遺跡・三仏生遺跡・割目A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 オ大竹憲昭 2003 『第1編第1章 遺跡 旧石器時代 2宮ノ入遺跡』『長野市誌』第12巻 資料編 原始・古代・中世 pp.7~8, 長野市誌編さん委員会  
 岡本東三 1979 『神子柴・長者久保文化について』『研究論集』V pp.1~57, 奈良国立文化財研究所  
 奥 義次 2002 『草創期の石斧—特に、東海・近畿の石斧について—』『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』 pp.56~61, 関西縄文文化研究会  
 小熊博史・前山精明 1993 『新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討』『環日本海における土器出現期の様相』 pp.53~145, 日本考古学協会新潟大会実行委員会  
 小熊博史他 1994 『荒沢遺跡—県営下田地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書』新潟県下田教育委員会  
 小熊博史・立木宏明 1998 『佐渡島における縄文時代草創期の遺物』『新潟考古』第9号 pp.133~149, 新潟県考古学会  
 小熊博史・立木宏明 2001 『V新潟県における縄文時代草創期の遺跡と遺物 1.新潟県内の遺跡と遺物の概要』『重要文化財考古資料展—火炎土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品—』 pp.107~112, 長岡市立科学博物館  
 小野 昭 1994 『Ⅱ考古資料 3遺跡と遺物 縄文時代 御手洗山遺跡 福井遺跡 新谷遺跡』『巻町史』資料編1 考古 pp.74~76, 新潟県巻町  
 キ九州旧石器文化研究会 2000 『九州の細石器文化Ⅲ—縄文文化への鼓動—』  
 旧石器(先土器・岩宿時代)研究プロジェクト 1994 『旧石器時代終末の諸問題』『神奈川の考古学の諸問題』 pp.1~22, 神奈川県立埋蔵文化財センター  
 ク窪田恵一 2001 『玉里村の後期旧石器時代終末—縄文時代草創期の石器研究—権現山古墳・「宮後」採集の石器を考える—』『玉里村立資料館報』Vol.6 pp.103~114, 玉里村立資料館  
 コ小林達雄 1960 『ある形態をもつ石斧について』『若木考古』第56号 pp.4~5, 國學院大學考古学会  
 小林達雄他 1980 『壬遺跡 新潟県中魚沼郡中里村』國學院大學考古学研究室  
 小林達雄他 1981 『壬遺跡1981 新潟県中魚沼郡中里村』國學院大學考古学研究室  
 小林達雄他 1983 『壬遺跡1983 新潟県中魚沼郡中里村』國學院大學考古学研究室  
 小林達雄他 1984 『津南町史』資料編上巻 新潟県津南町  
 小林達雄他 1985 『中里村史』資料編上巻 原始・古代・中世 中里村史編さん委員会  
 小林達雄他 1987 『壬遺跡1987 新潟県中魚沼郡中里村』國學院大學考古学研究室  
 小林達雄他 1992 『壬遺跡』中里村教育委員会  
 小林 弘・河内 昇 2002 『新発田市長沢牛谷窪遺跡採集の大型石斧、下の前遺跡採集の石器について』『新潟考古学談話会会報』第26号 pp.42~44, 新潟考古学談話会  
 サ埼玉県考古学会 1986 『埼玉考古—埼玉考古学会30周年記念—シンポジウム資料 縄文時代草創期、爪形土器と他縄文土器をめぐる諸問題』  
 佐藤雅一 1985 『権現平遺跡発掘調査報告』『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下倉山城跡 権現平遺跡 両新田遺跡』 pp.39~62, 新潟県教育委員会  
 佐藤雅一 1988 『西倉遺跡—第2次発掘調査—西倉地区農村基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書』新潟県川口町教育委員会  
 佐藤雅一 1998 a 『第1章 旧石器時代の狩猟民』『与板町史』 pp.69~80, 新潟県与板町  
 佐藤雅一 1999 b 『第2章 縄文時代第5節 道具と技術 第1項 草創期の石器群』『新潟県の考古学』 pp.160~166, 高志書院  
 佐藤雅一 2001 a 『津南町胴拔原A・上原E遺跡の調査概要』『新潟県考古学会第13回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会  
 佐藤雅一 2001 b 『V新潟県における縄文時代草創期の遺跡と遺物 2. 信濃川上流域の遺跡と遺物の様相』『重要文化財考古資料展—火炎土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品—』 pp.113~126, 長岡市立科学博物館  
 佐藤雅一他 1987 『梨ノ木平遺跡』新潟県塩沢町教育委員会  
 佐藤雅一他 1995 『第1章 堀之内町の考古』『堀之内町史』資料編 pp.3~221, 新潟県堀之内町  
 佐藤雅一他 1997 『平成9年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』新潟県津南町教育委員会  
 佐藤雅一他 1998 『同尻遺跡群試掘調査報告書 国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡確認試掘調査及び発掘調査報告書 寺田上A遺跡 道尻手の塚 正面ヶ原B遺跡』新潟県津南町教育委員会  
 佐藤雅一他 1998 『平成10年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』新潟県津南町教育委員会  
 佐藤雅一他 1999 『平成11年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』新潟県津南町教育委員会  
 佐藤雅一・笠井洋祐 2000 『中里村久保寺南遺跡の調査』『新潟県考古学会第12回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会  
 佐藤雅一他 2000 『平成12年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』新潟県津南町教育委員会  
 佐野勝宏 2002 『第IV章 考察 1.旧石器時代出土遺物のまとめ』『正面中島遺跡』 pp.189~203, 新潟県津南町教育委員会  
 佐原 真 1977 『石斧論—横斧から縦斧へ—』『考古論集』 pp.45~86, 松崎寿和先生退官記念事業会  
 澤田 敦他 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 澤田 敦・田海義正 2002 『荒屋遺跡—範囲確認調査報告書—』新潟県川口町教育委員会  
 シ上越市 2003 『上越市史』資料編2 考古  
 ス菅沼 亘 2002 『中里村古城遺跡の局部磨製石斧—石澤貢義氏コレクションの紹介(1)』『越佐補遺些』第7号 pp.9~10, 越佐補遺些の会  
 杉浦重信 1987 『東麓郷1・2遺跡』北海道富良野市教育委員会  
 鈴木 隆・大場亜弥・須藤 隆 2003 『宮城県—迫町採集の大型局部磨製石斧2例』『宮城考古』第5号 pp.239~254, 宮城県考古学会  
 鈴木俊成 1985 『第VI章 遺物 1 縄文時代 b. 石器』『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 金屋遺跡』 pp.47~49, 新潟県教育委員会

- 鈴木俊成 1992 「松ヶ城遺跡出土の石器群について」『新潟考古学談話会会報』第9号 pp.38～43, 新潟考古学談話会
- 鈴木俊成・寺崎裕助他 1996 「関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 七芹沢清八・大関利之 2002 「亀が窪採集の神子柴系石斧をめぐって」『栃木県考古学会誌』第23集 pp.19～42, 栃木県考古学会
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本考古学研究所研究報告』第2集 pp.1～67, 東北大学日本文化研究所
- 芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』12 pp.1～19, 新潟県人文研究会
- 芹沢長介・須藤 隆 1968 「田沢遺跡の発掘調査予報」『考古学ジャーナル』27 pp.6～8, ニュー・サイエンス社
- 芹沢長介・須藤 隆他 2003 「荒屋遺跡 第2・3次発掘調査報告書」東北大学大学院文学研究科考古学研究室 川口町教育委員会
- 夕高木公輔 2002 「大清水遺跡-栗山地区団体営総合基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」新潟県広神村教育委員会
- 高橋保雄 1988 「第1章原始 第1編原始・古代・中世 5 松代町の縄文時代の遺跡」『松代町史』pp.294～300, 新潟県松代町史編纂室
- 田中英司 2001 「日本先史時代におけるテポの研究」平電子印刷所
- 田中祐二 2002 「鳥浜貝塚出土の石器群(1)-草創期石器群の器種分類-」『鳥浜貝塚研究』3 pp.69～86, 鳥浜貝塚研究会
- 谷口康浩 1996 「室谷洞窟出土土器の再検討」『かみたに』pp.171～192, 神谷地域学術総合調査団
- 谷口康浩 2003 「長者久保遺跡-神子柴石器群と細石刃石器群の関係-段階編年を脱却した遺構期研究の現在-」『シンポジウム 日本の細石刃文化Ⅱ-細石刃文化研究の諸問題-』pp.171～192, ハヶ岳旧石器研究グループ
- ツ立木宏明 2001 「上越市山屋敷Ⅰ遺跡出土の局部磨製石斧」『上越市史研究』第6号 pp.87～88, 新潟県上越市
- 立木宏明 2003 「新潟県村松町大久保遺跡および田上町川船河遺跡出土の縄文時代草創期の石斧」『新潟考古』第14号 pp.99～105, 新潟県考古学会
- 立木宏明他 1996 「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡」新潟県朝日村教育委員会
- 立木宏明他 1997 「ガラハギ遺跡」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ 二又遺跡 堅岩遺跡 ガラハギ遺跡』新潟県朝日村教育委員会
- 堤 隆 1997 「更新世紀末における礫器使用行動の意味-細石刃文化における礫器編年化についての解釈-」『長野県考古学会誌』第82巻 pp.29～41, 長野県考古学会
- 堤 隆 1998 「唐沢B遺跡の様相」『唐沢B遺跡』pp.57～72, 千曲川水系古代文化研究所
- ト富樫雅彦・小熊博史・徳澤啓一 1997 「三島郡越路町山屋遺跡採集の大型局部磨製石斧」『越佐補遺些』第2号 pp.12～19, 越佐補遺些の会
- 土橋由理子・寺崎裕助他 1996 「一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 大堀遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ長岡市 1992 「長岡市史」資料編1 考古
- 中島英子 2000 「第3章 星光山荘B遺跡」『上信越道自動車埋蔵文化財発掘調査報告書16-信濃町 その2-』日本道路公団 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター
- 中束耕志 1994 「第4章第1節3 a 局部磨製石斧」『小島田八日市遺跡』pp.34～35, 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中村孝三郎 1960 「小瀬が沢洞窟」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1961 「越後の石器」『長岡市立科学博物館研究報告』第2号 pp.53～88 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1966 「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1978 「越後の石器」学生社
- 中村孝三郎・小片 保 1964 「室谷洞窟」長岡市立科学博物館
- 中村由克 1992 「長野県上ノ原遺跡における細石刃文化の遺構(2)」『考古学ジャーナル』344 pp.33～36, ニュー・サイエンス社
- ニ新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1971 「五十嵐川流域における先史遺跡」
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1980 「五十嵐川流域における先史遺跡」Vol.2
- ヒ平吹 靖 1999 「川西町下平新田出土の打製石斧」『越佐補遺些』第4号 pp.84～85, 越佐補遺些の会
- 広田永二・中澤幸男 1994 「津南町の縄文時代草創期遺跡」『新潟考古』第5号 pp.105～118, 新潟県考古学会
- フ藤田富士夫 1991 「バステル形石製品について」『考古学論究』創刊号 pp.27～36, 立正大学考古学会
- 藤森栄一 1937 「北越後村杉出土の瀝青質石器について」『考古学』8-10 pp.456～457, 東京考古学会
- 藤森栄一 1965 「旧石器の狩人」学生社
- 藤沢宗平・林 茂樹 1961 「神子柴遺跡-第一次発掘調査概報-」『古代学』第9巻第3号 pp.142～158, 古代学協会
- 藤巻正信他 1991 「関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡」新潟県教育委員会
- 藤巻正信他 1996 「磐越自動車道関係発掘調査報告書 吉ヶ沢遺跡A地点・上ノ平B地点・中峰遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木星野洋治 1992 「卯ノ木遺跡発掘調査概報 主要地方道改修工事に伴う遺跡調査報告書」新潟県津南町教育委員会
- マ麻柄一志 1988 「神子柴型石斧の機能-破損と石質に関するノート-」『旧石器考古学』37 pp.59～66, 旧石器文化談話会
- 前山精明 1997 「有馬崎遺跡」新潟県分水町教育委員会
- 増子正三 2003 「第1章考古第1節原始・古代・中世の遺跡3 葉師平A遺跡」『笹神村史』資料編1 原始・古代・中世 pp.10～11, 新潟県笹神村
- ミ三宅徹也 1979 「大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館
- モ森嶋 稔 1968 「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4 pp.11～22, 信濃史学会
- 森嶋 稔 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』22-10 pp.156～172, 信濃史学会
- 森嶋 稔他 1998 「唐沢B遺跡」千曲川水系古代文化研究所
- ヤ八木次男・佐藤雅一 1988 「旧石器時代から縄文時代草創期の遺物-魚野川流域を中心として-」『新潟県考古学談話会会報』第1号 pp.37～45, 新潟県考古学談話会
- 安川豊史 2003 「石斧の様相」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』pp.115～117, 中・四国旧石器文化談話会
- 山内清男 1960 「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯 pp.1～2, 上代文化研究会
- 山内清男・佐藤達雄 1964 「縄紋土器の古さ」『科学読売』12巻13号 pp.18～26; 84～88,

別表1 愛宕澤遺跡石器・礫属性表

図版No	報告書No	区分	注記	取上No	標高(m)	層位	形態	石材	母岩	接合	時期	ブロック	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石器属性備考
5	1	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-2	2	15.283	IV	石斧	珪質凝灰岩	単		縄文時代草創期	1	176.10	57.55	36.90	407.70	刃部欠損。
5	2	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-5	5	14.183	IV	石斧	珪質凝灰岩	単		縄文時代草創期	1	52.45	59.85	21.20	78.85	刃部。
6	3	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-1-14	1	15.349	IV	石斧	緑色凝灰岩	単	報告書No3(取上No14)と接合	縄文時代草創期	1	86.50	54.10	32.90	107.35	基部。接合長159.20mm、幅54.10mm、厚さ32.90mm、重量273.49g。
6	3	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-1-14	14	15.196	IV	石斧	緑色凝灰岩	単	報告書No5(取上No1)と接合	縄文時代草創期	1	72.70	49.50	25.60	166.14	刃部。接合長159.20mm、幅54.10mm、厚さ32.90mm、重量273.49g。
6	4	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-4	4	14.824	IV	石斧	珪質凝灰岩	単		縄文時代草創期	1	114.00	47.10	29.25	159.20	基部。
7	5	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-16	16	15.040	IV	石斧	緑色凝灰岩	単	報告書No5(取上No18)と接合	縄文時代草創期	1	81.90	41.20	27.60	95.37	刃部。接合長195.00mm、幅41.20mm、厚さ27.60mm、重量215.80g。
7	5	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-18	18	14.896	IV	石斧	緑色凝灰岩	単	報告書No5(取上No16)と接合	縄文時代草創期	1	118.95	37.90	25.00	120.43	基部。接合長195.00mm、幅41.20mm、厚さ27.60mm、重量215.80g。
7	6	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-15	15	14.885	IV	石斧	珪質頁岩	単		縄文時代草創期	1	72.00	42.00	28.00	82.89	基部。
8	7	発掘	98AZ-4トレ拡-IV-3	3	15.255	IV	石核	玉髓	単		縄文時代草創期	1	97.40	97.50	95.30	826.02	
9	8	発掘	98AZ-4トレ拡-III-13	13	15.242	III	礫器	珪質凝灰岩	単		縄文時代草創期	1	106.75	123.05	49.15	591.28	
9	9	一括	98AZ-4トレ拡-III-19 地点不明	19	-	不明	礫石	安山岩	単		縄文時代草創期	1	94.95	64.75	28.50	233.99	
9	10	発掘	98AZ-4トレ拡-III-10	10	15.232	III	礫石	安山岩	単		縄文時代草創期	1	76.85	54.70	50.30	268.50	
9	11	発掘	98AZ-4トレ拡-III-12	12	14.241	III	礫器	チャート	単		縄文時代草創期	1	39.50	43.30	23.55	57.73	
9	12	発掘	98AZ-4トレ拡-III-11	11	15.083	III	礫石	緑色凝灰岩	単		縄文時代草創期	1	65.60	69.25	41.90	234.83	
9	13	発掘	98AZ-4トレ拡-III-8	8	15.530	III	パステル形石製品	滑石	-		縄文時代前期以降	-	27.90	5.50	4.80	1.23	
-	-	発掘	98AZ-4トレ拡-III-9	9	15.733	III	礫	安山岩	-		縄文時代草創期	1	124.50	75.90	53.50	640.12	写真図版6

別表2 愛宕澤遺跡縄文土器観察表

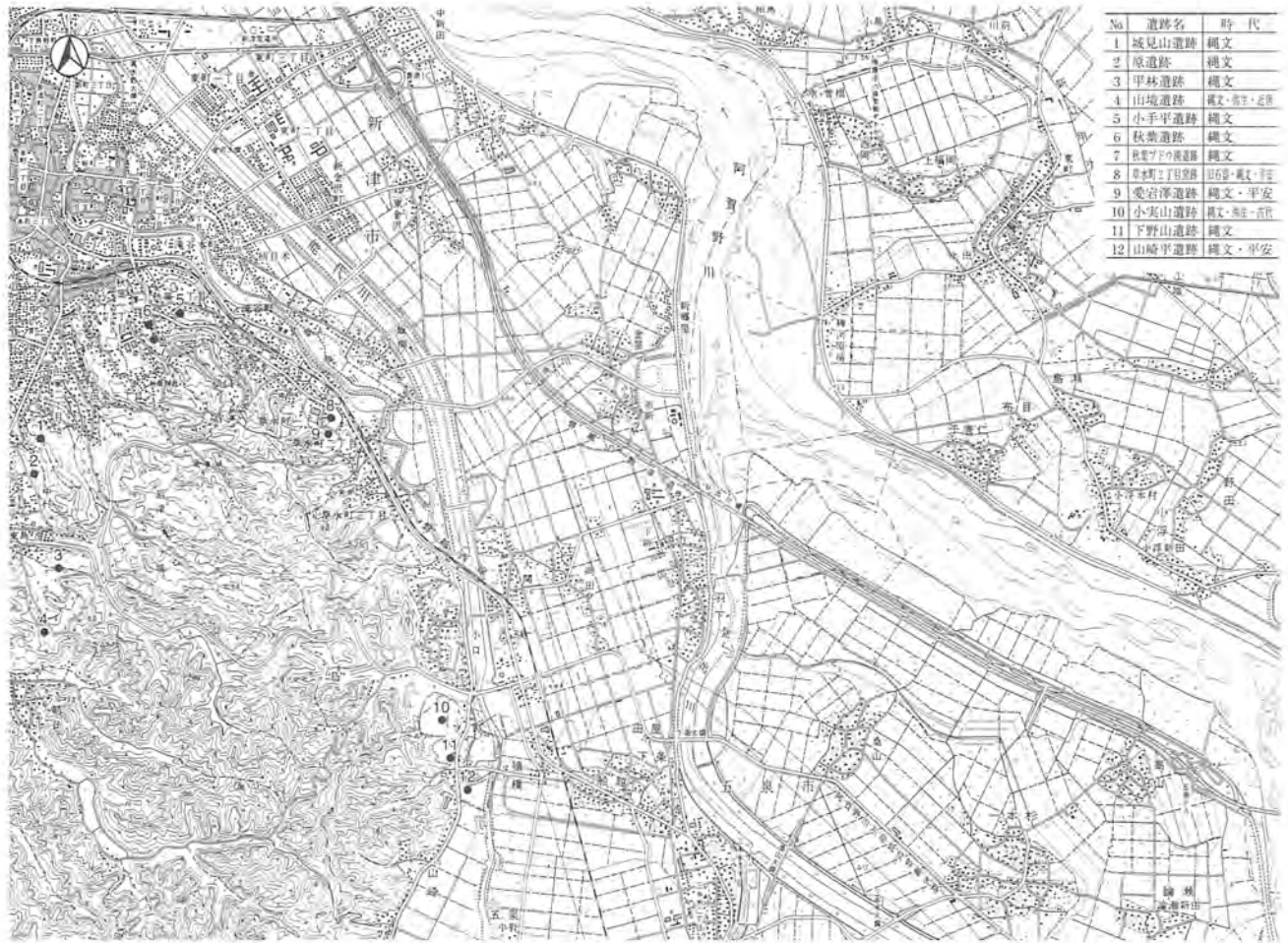
1 胎土 胎土に含まれる鉱物等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「角」は角閃石粒、「チ」はチャート粒、「赤」は赤色粒を表す。

図版No	報告書No	区分	注記	取上No	標高(m)	層位	種別	分類	文様	胎土	時期	備考
10	14	-	98AZ-4トレ拡-III-6	6	14.408	III	縄文土器	深鉢	縄文LR	石・長・角・赤	縄文時代前期以降	
10	15	-	98AZ-4トレ拡-III-7	7	15.413	III	縄文土器	深鉢	縄文?	石・長・チ	縄文時代前期以降	
10	16	-	98AZ-4トレ拡-III-17	17	15.019	III	縄文土器	深鉢	縄文LR	石・長・角	縄文時代前期以降	

別表3 愛宕澤遺跡古代・中世土器観察表

- 出土位置 トレンチ名を記した。
- 器種 第V章に記した。
- 径高指数 器高/口径×100
- 底径指数 底径/口径×100
- 法量 口径・底径・器高を示す。括弧付の数値は遺存率の低いものである。
- 胎土 須恵器・土師器・珠洲焼について胎土に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰石、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。
- 色調 「新版標準土色帳」[小山・竹原 1967]の記号を記した。
- 焼成 酸化炭焼成・還元炭焼成の区別を記した。須恵器で酸化したものには褐色あるいは橙色の色調で軟質なものを表す。白色・灰白色のものは含めていない。
- 手法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。「無調整」はそれが認められないもの。回転方向は回転台の回転方向を表す。底部調整やロクロケズリ・ロクロナデから判断した。
- 遺存率 分数表示で遺存割合を示した。

図版No	遺物No	出土位置	層位	種別	器種	法量(cm)			器高指数	底径指数	胎土	色調	焼成	手法		遺存率			備考		
						口径	底径	器高						外面	内面	底部	口縁部	全体			
10	17	2T	-	土師器	無台碗	12.6	5.0	4.0	31.7	39.7	石・長・白	にぶい褐(75YR5/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切・無調整	右	14/36	36/36	21/36	内・外スス
10	18	2T, 3T	-	土師器	無台碗	-	5.6	-	-	-	石・長・角	にぶい黄橙(10YR6/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切・無調整	右	-	20/36	-	2T-3点、3T-1点
10	19	2T	-	土師器	長甕	-	-	-	-	-	石・長・白・角	にぶい黄橙(10YR6/4)	酸化	平行タタキメ	平行当て具痕	-	-	-	-	-	
10	20	2T	-	土師器	長甕	21.3	-	-	-	-	石・長・焼・白	明黄褐(10YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	4/36	-	-	
10	21	2T	-	土師器	長甕	-	-	-	-	-	石・長・チ・白・角・雲	明黄褐(10YR7/6)	酸化	平行タタキメ	平行当て具痕	-	-	-	-	-	
10	22	3T	-	土師器	無台碗	13.4	4.6	4.1	30.6	34.3	石・長・焼・白・角	にぶい黄橙(10YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切・無調整	右	10/36	36/36	22/36	
10	23	3T	-	土師器	長甕(220)	-	-	-	-	-	石・長・雲	にぶい黄橙(10YR6/4)	酸化	カキメ	-	-	-	3/36	-	-	
10	24	14T	-	土師器	無台碗	12.0	-	-	-	-	石・長・雲・角	浅黄橙(75YR8/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	6/36	-	-	
10	25	14T	-	珠洲焼	甕	-	-	-	-	-	石・長・焼・白・海	灰(N4/)	還元	平行タタキメ	ハケメ	-	-	-	-	-	
10	26	Bトレンチ	褐灰シルト層	土師器	無台碗	-	6.8	-	-	-	石・長・白	橙(75YR6/6)	酸化	-	ロクロナデ	糸切	-	-	6/36	-	
10	27	Bトレンチ	褐灰シルト層	土師器	小甕	-	6.0	-	-	-	石・長	にぶい黄橙(10YR6/4)	酸化	-	-	糸切・無調整	-	-	14/36	-	
10	28	Bトレンチ	褐灰シルト層	土師器	小甕	-	-	-	-	-	石・長	にぶい黄橙(10YR7/4)	酸化	-	-	-	-	-	-	-	
10	29	宅遺予定地	山林	須恵器	大甕	-	-	-	-	-	石・長・焼	灰(5Y5/1)	還元	平行タタキメ	当て具痕	-	-	-	-	-	表採



周辺の地形と旧石器・縄文時代の遺跡 (国土地理院2002年：新津1/25,000→1/50,000)



- 1. 草水町2丁目遺跡
- 2. 愛宕澤遺跡

愛宕澤遺跡と周辺の遺跡 (新津市都市計画図1993年：1/2,500→1/5,000)

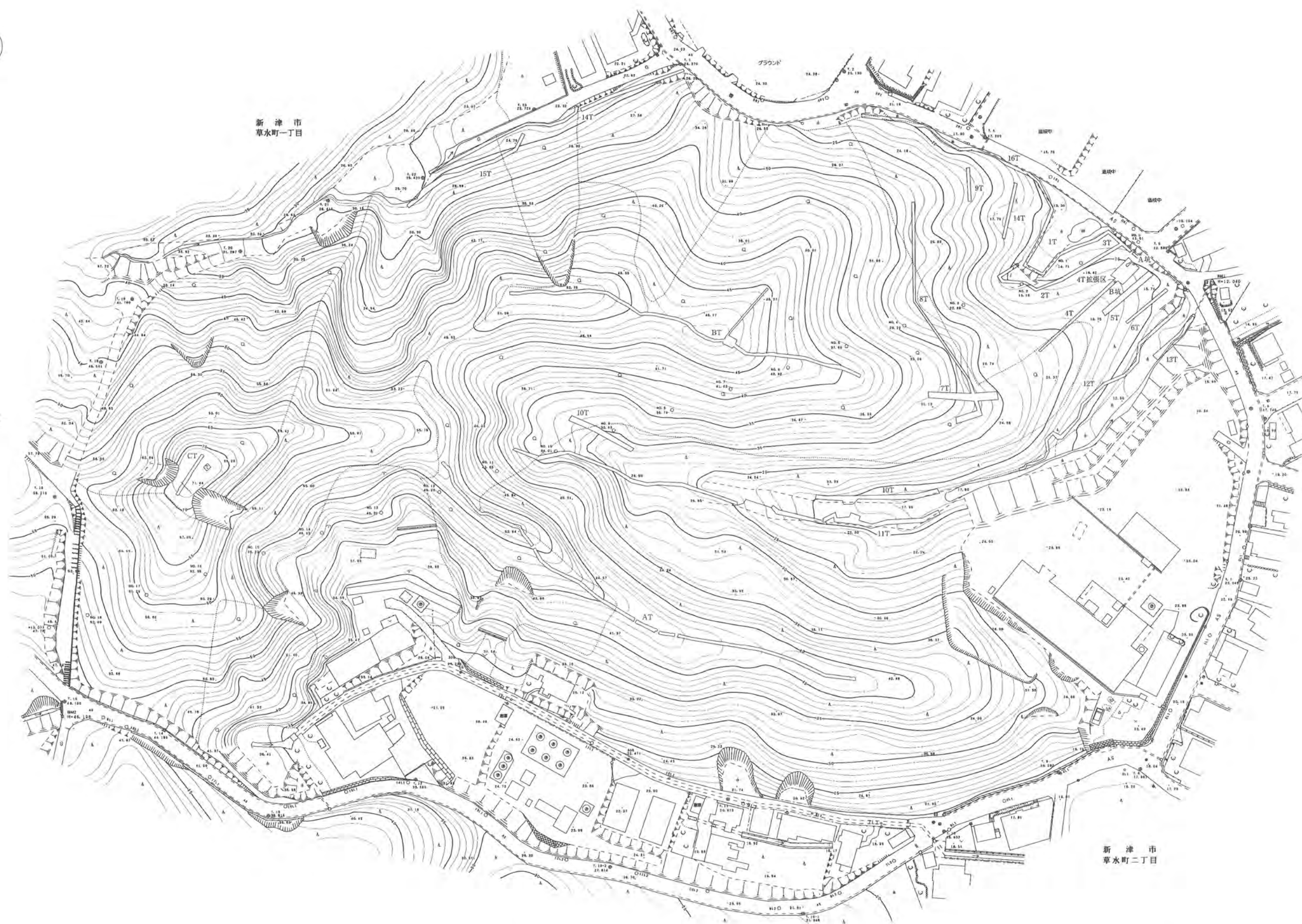




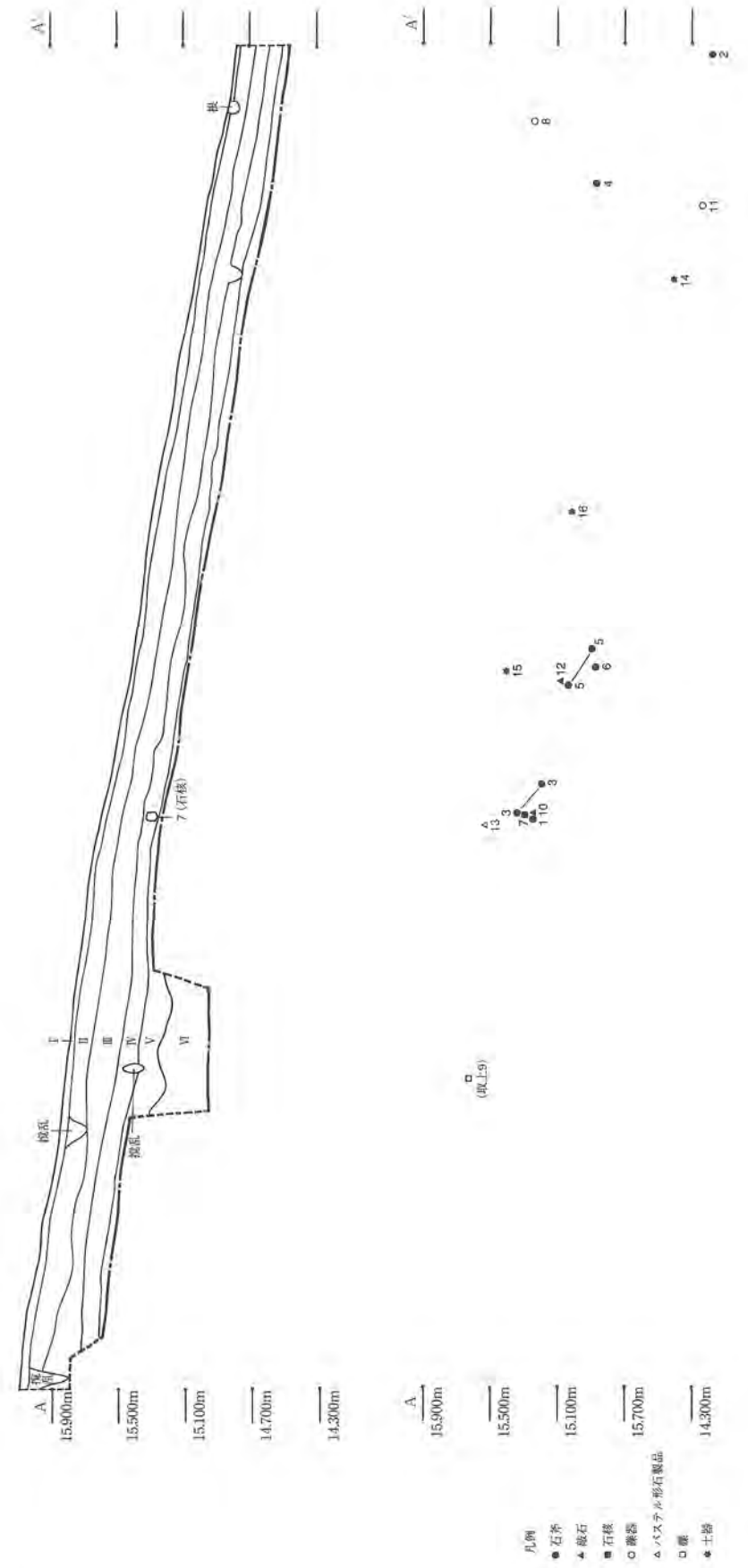
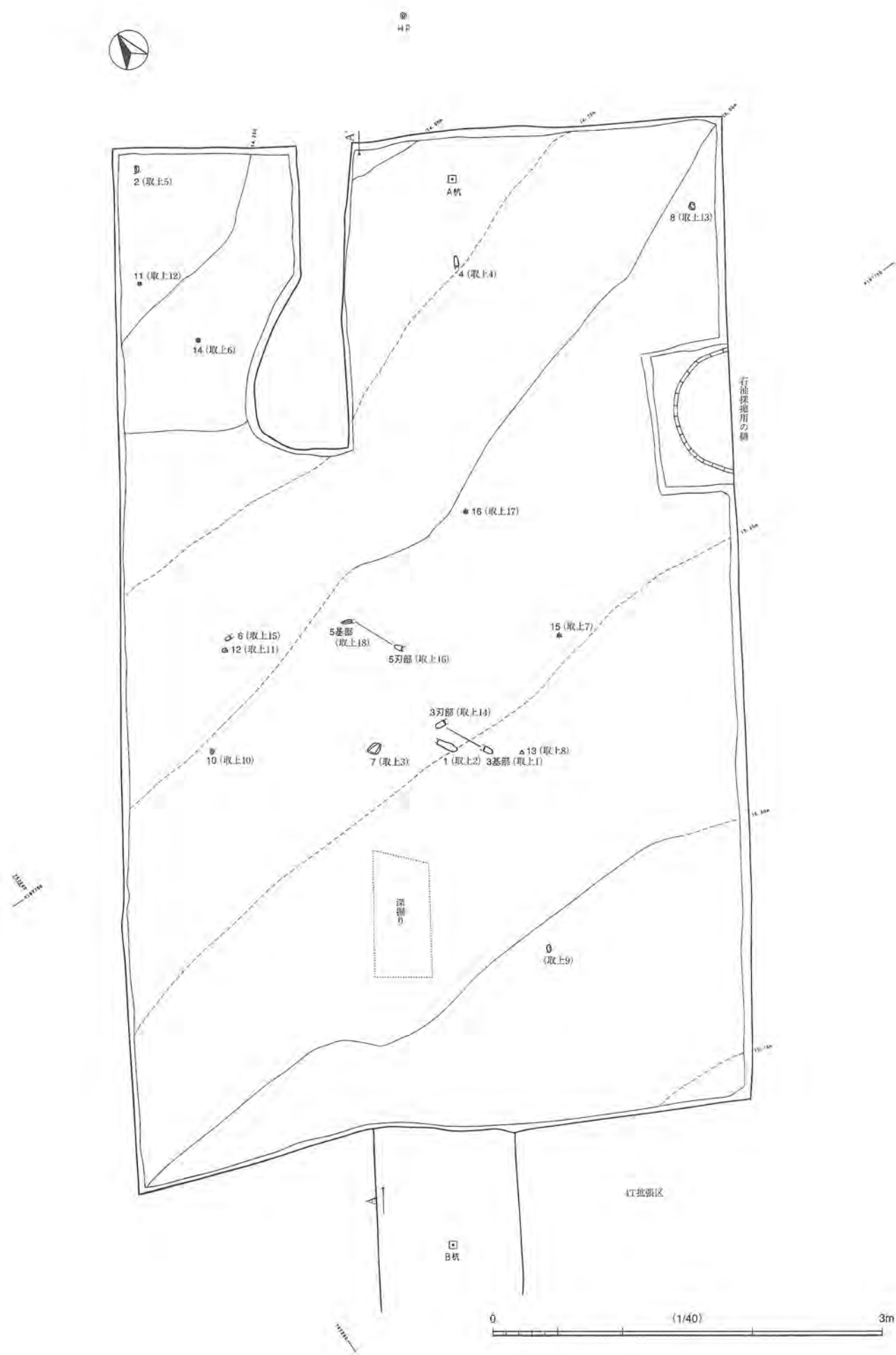
新潟県「土地分類基本調査 新潟・新津」1972・1974年より作成 (1/150,000)

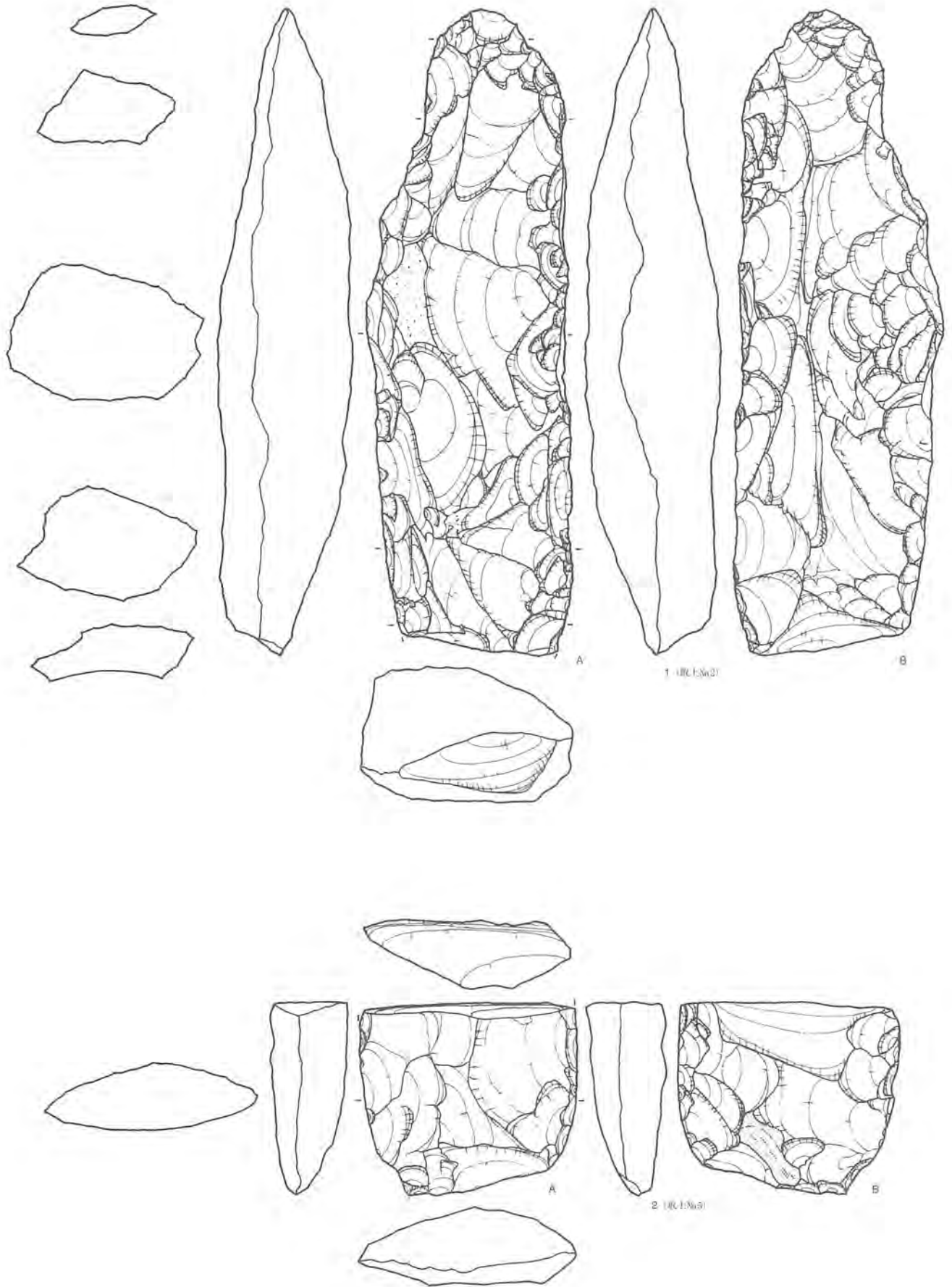


新津市  
草水町一丁目

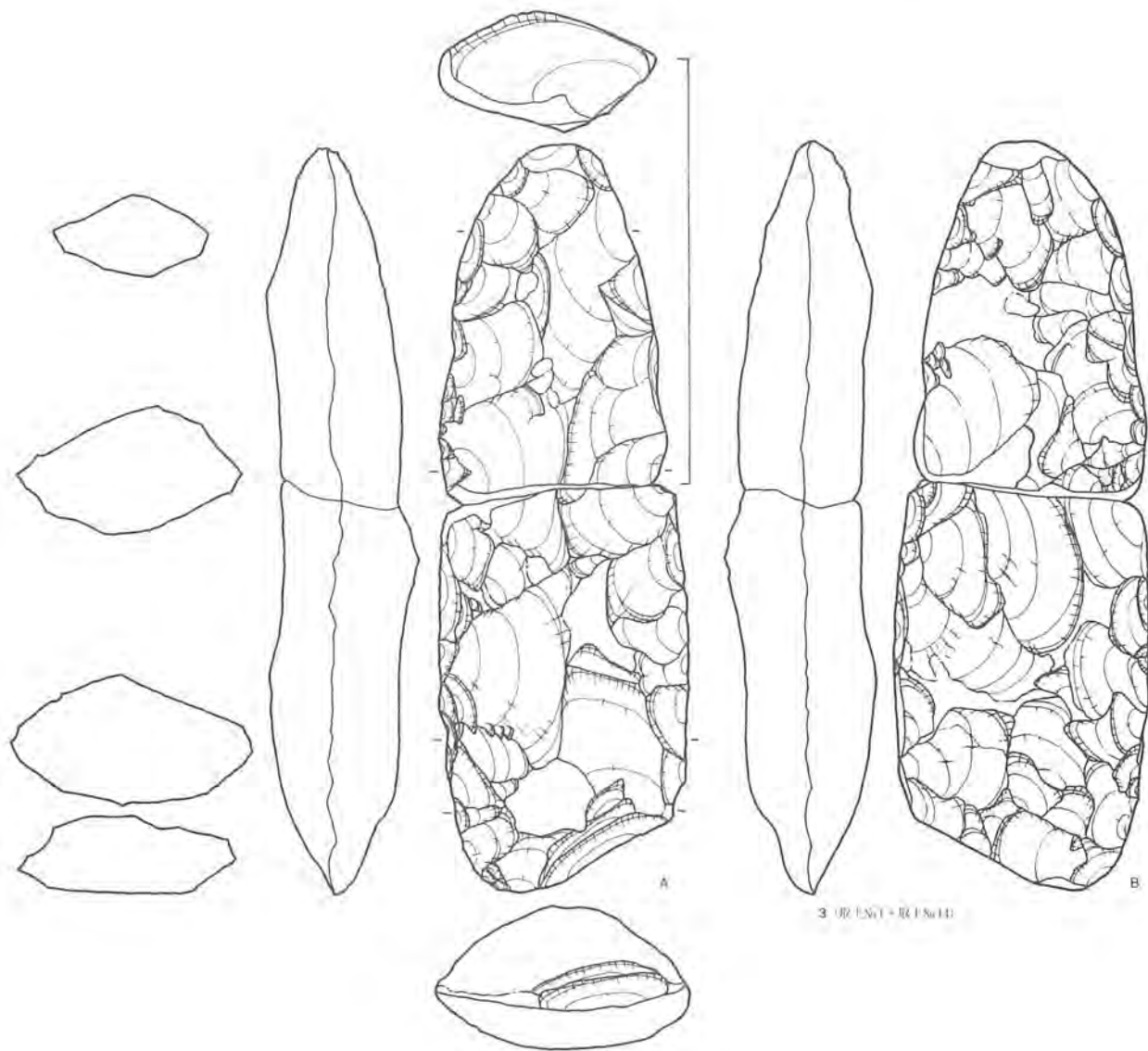


新津市  
草水町二丁目

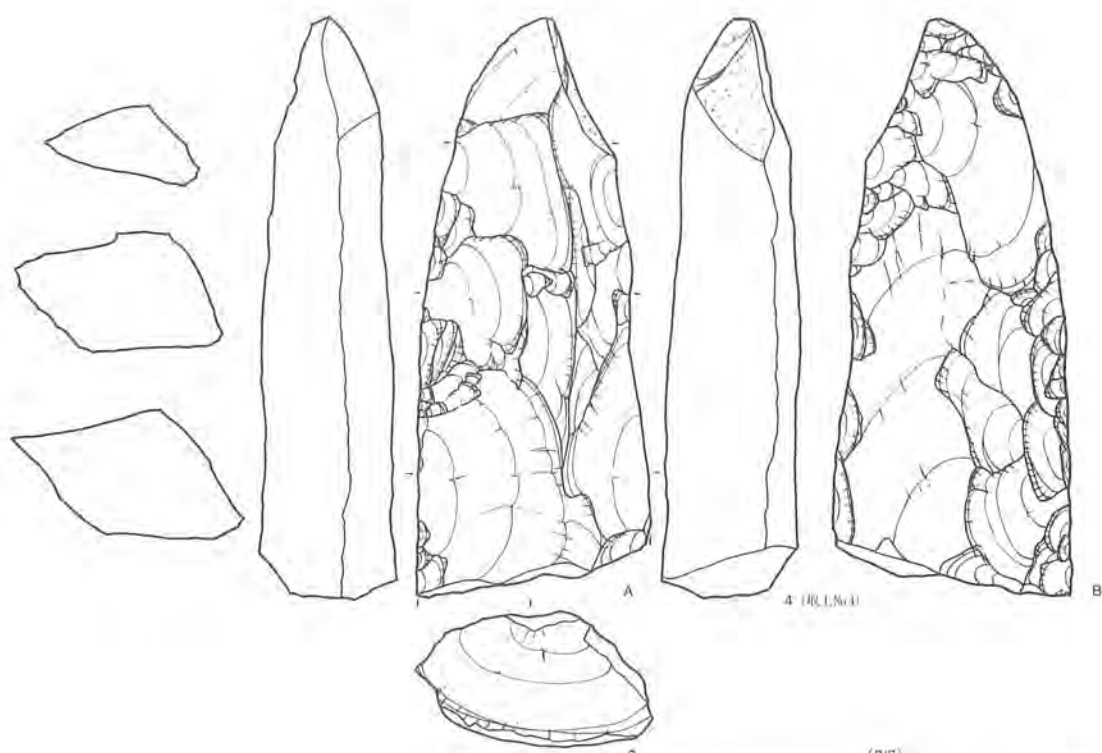




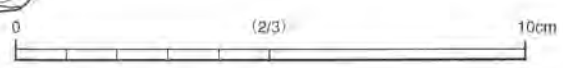
0 (2/3) 10cm

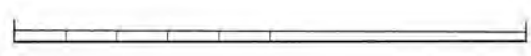
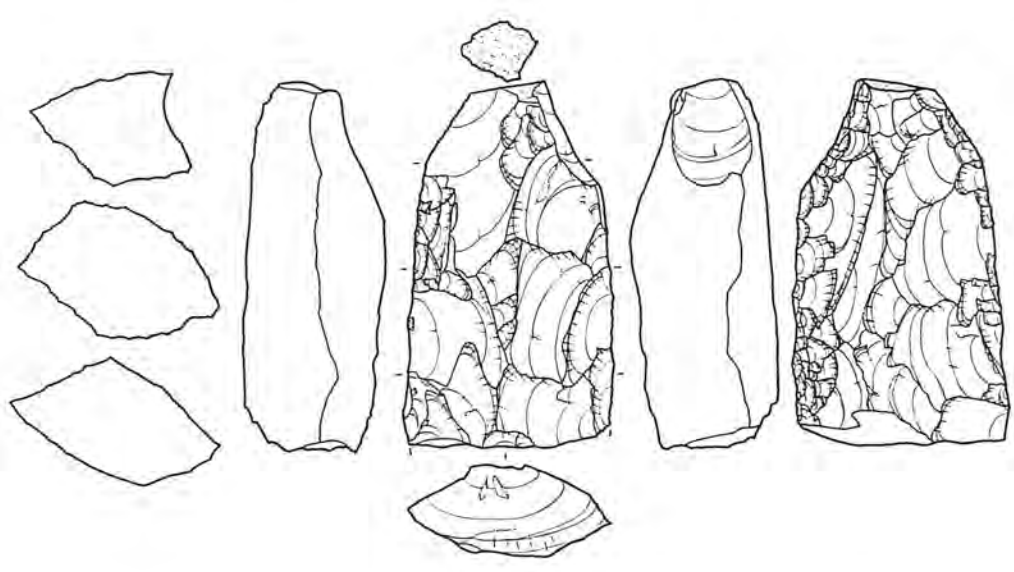
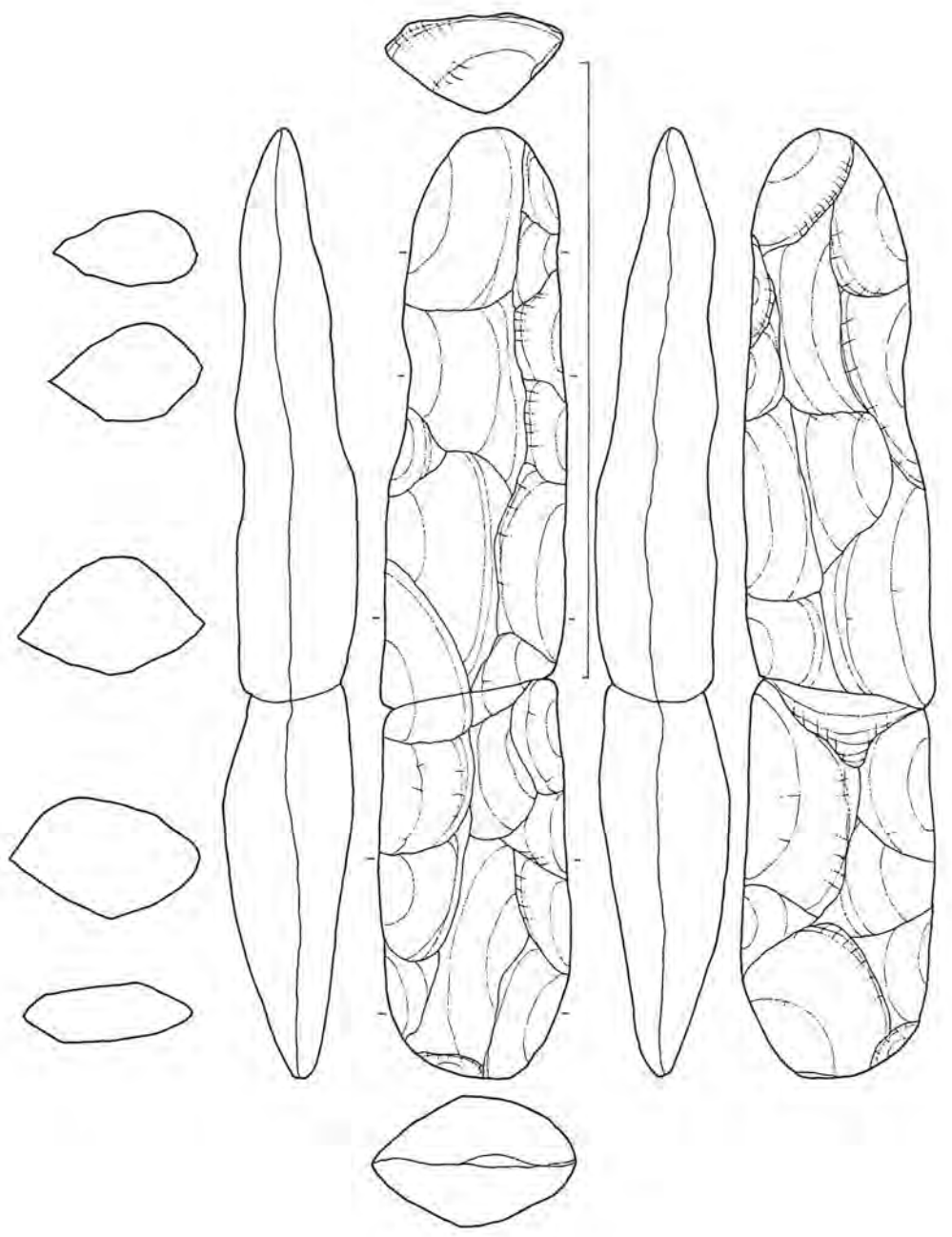


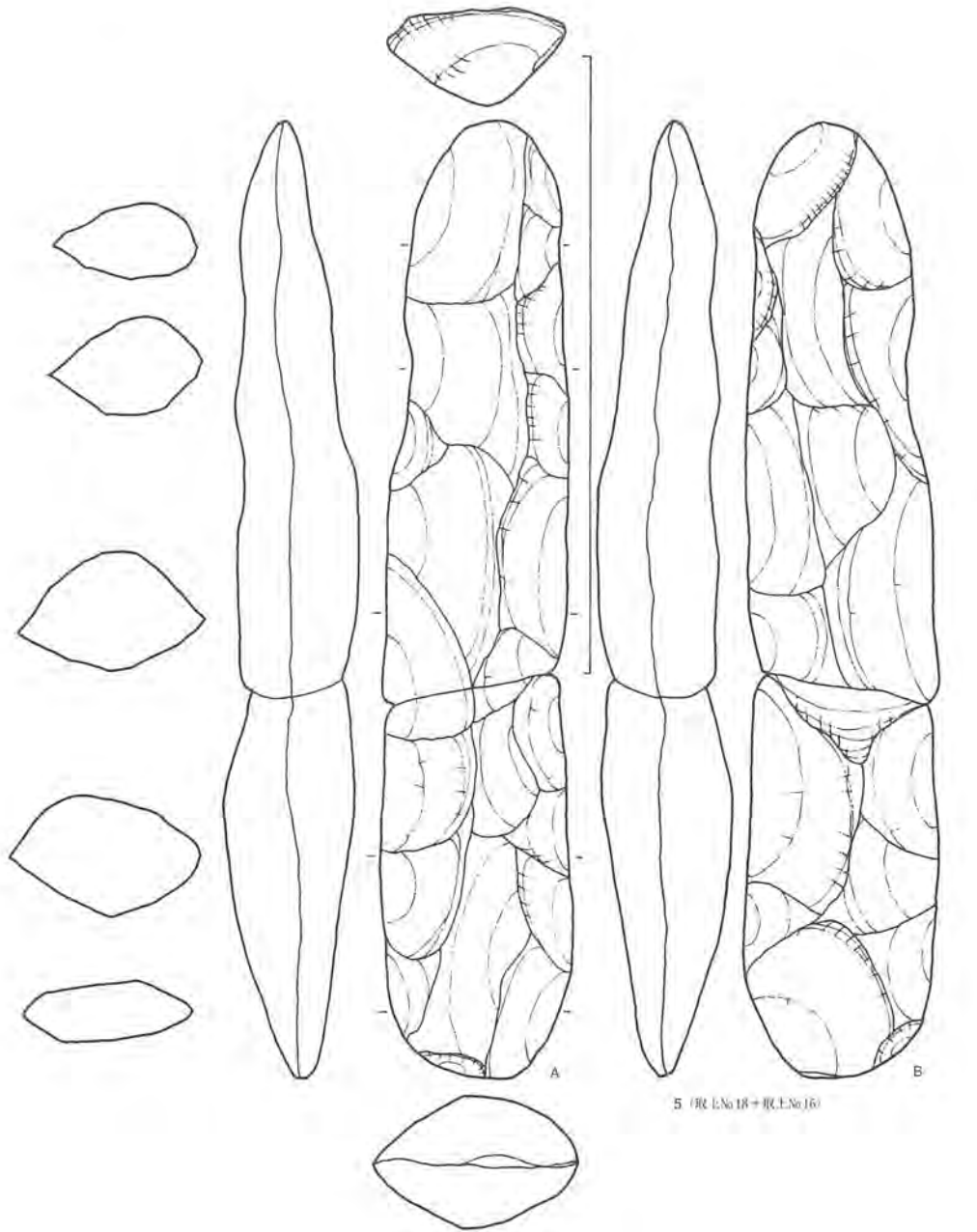
3 (原上No1・取付No11)



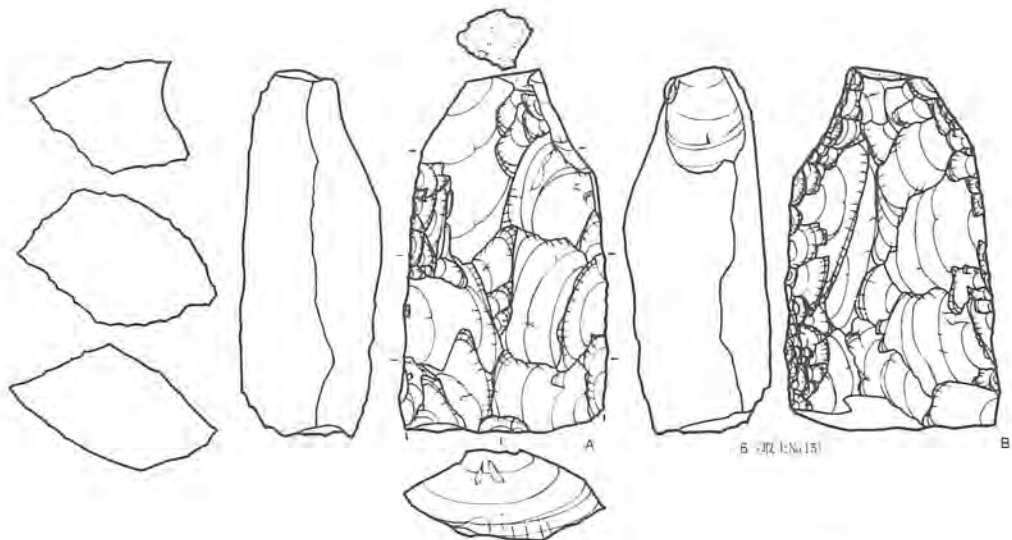
4 (原上No1)



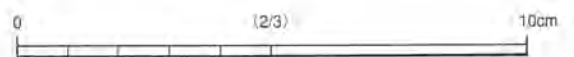


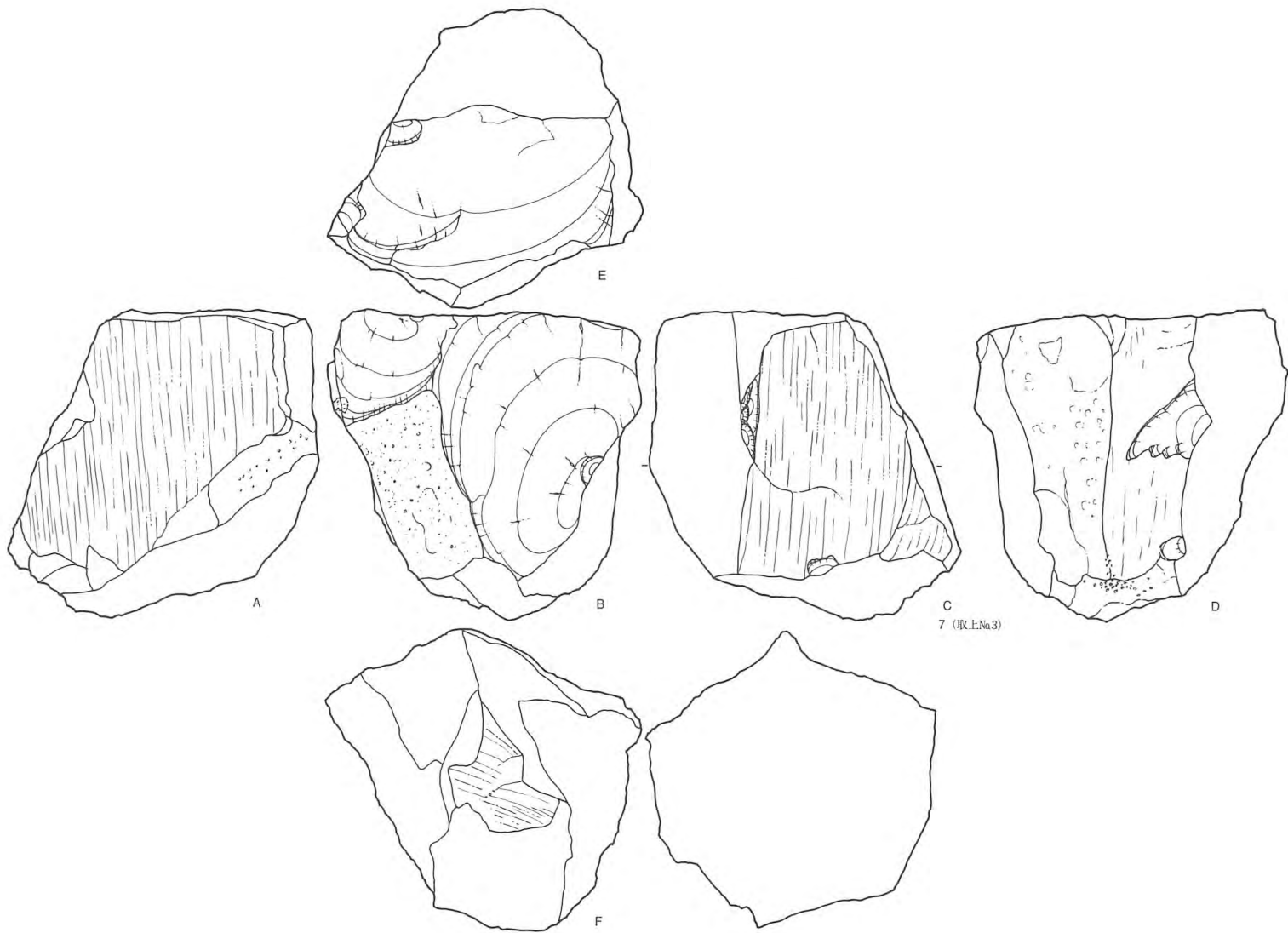


5 (取上No.18+取上No.16)



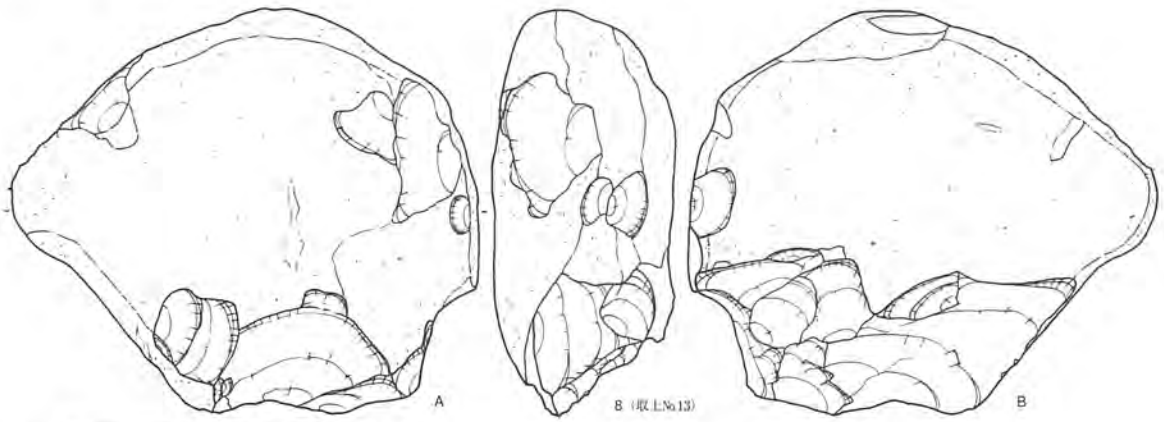
6 (取上No.15)



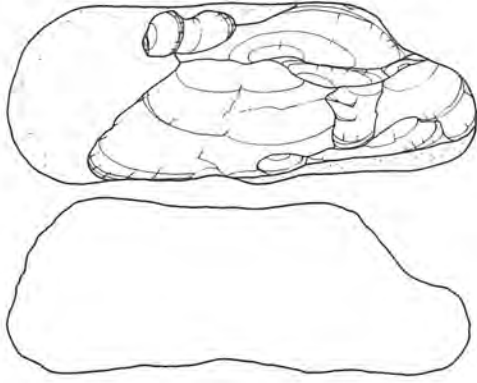


0 (1/2) 10cm

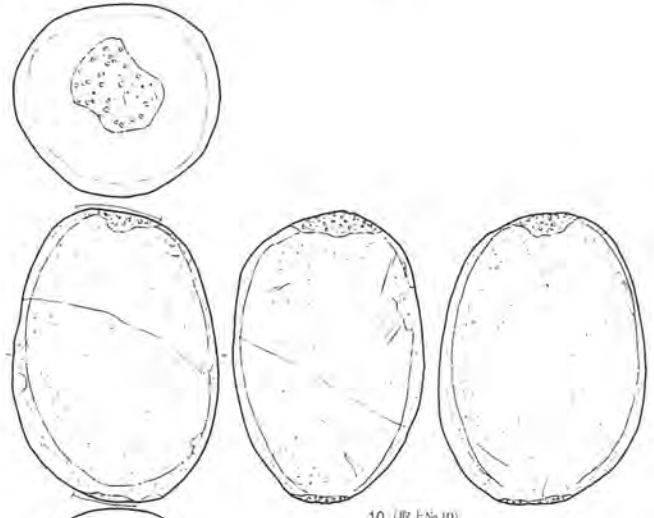




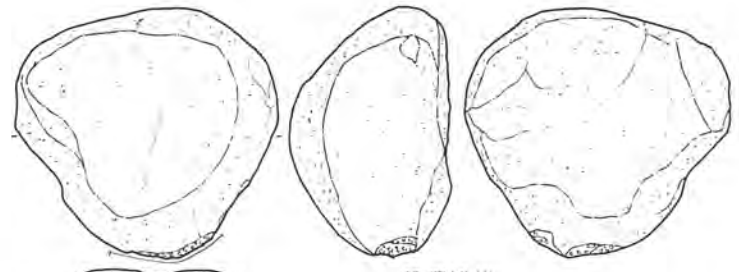
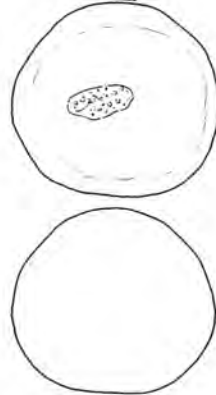
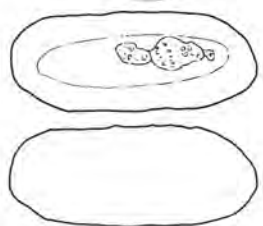
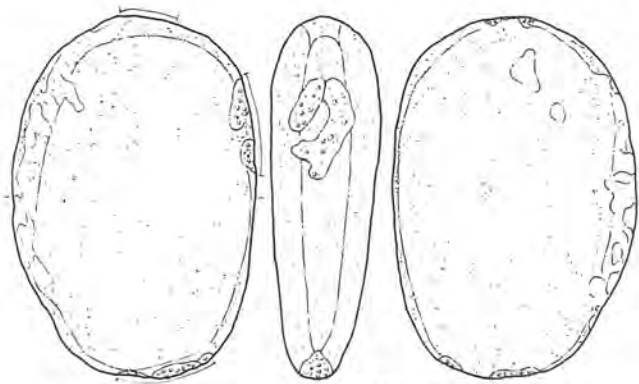
8 (取上No.13)



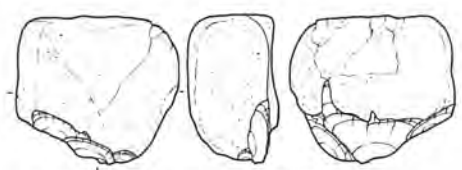
9 (取上No.19一括)



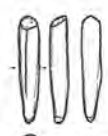
10 (取上No.10)



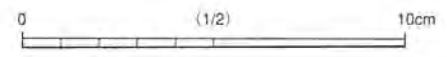
12 (取上No.11)

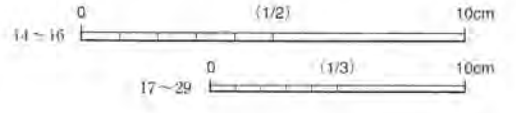
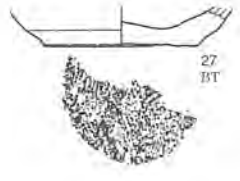
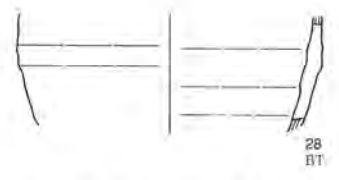
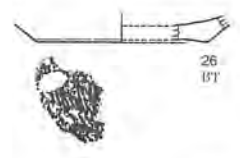
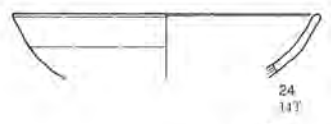
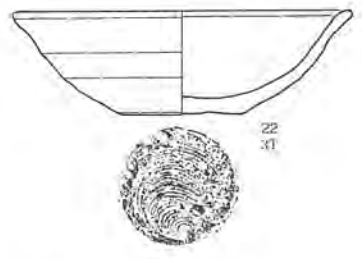
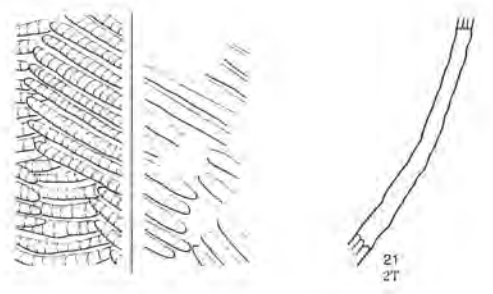
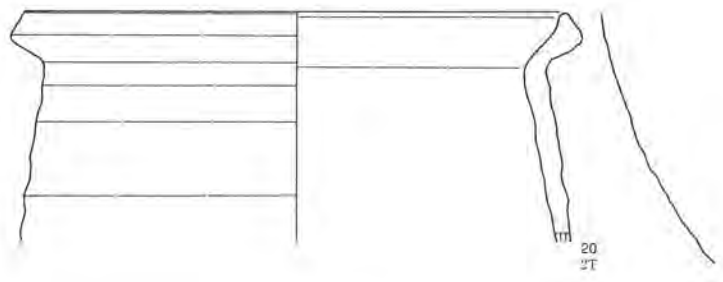
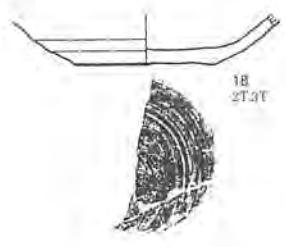
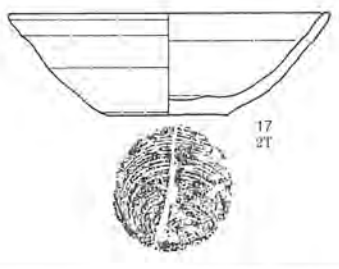


11 (取上No.12)



13 (取上No.8)







4 トレンチ拡張区ブロック 1 出土状況 (南東→北西)



4 トレンチ拡張区ブロック 1 出土状況 (北東→南西)



基本土層と石器出土状況（東→西）



基本土層（南東→北西）



調査地現況 (西→東)



調査風景 (北→南)



4 T 完掘状況 (南→北)



2・3 T 完掘状況 (北→南)



A T 完掘状況 (東→西)



B T 完掘状況 (西→東)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北西→南東)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (南東→北西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (南東→北西)



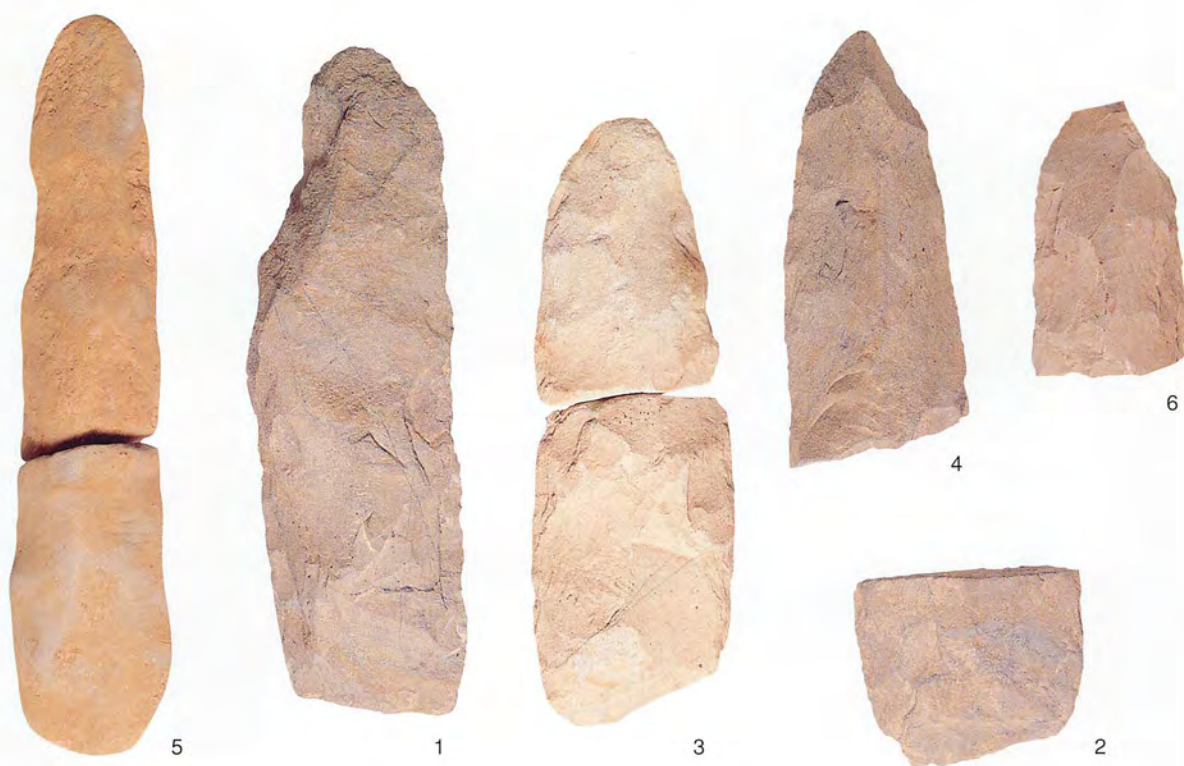
4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



4 T 拡張区遺物出土状況 (北東→南西)



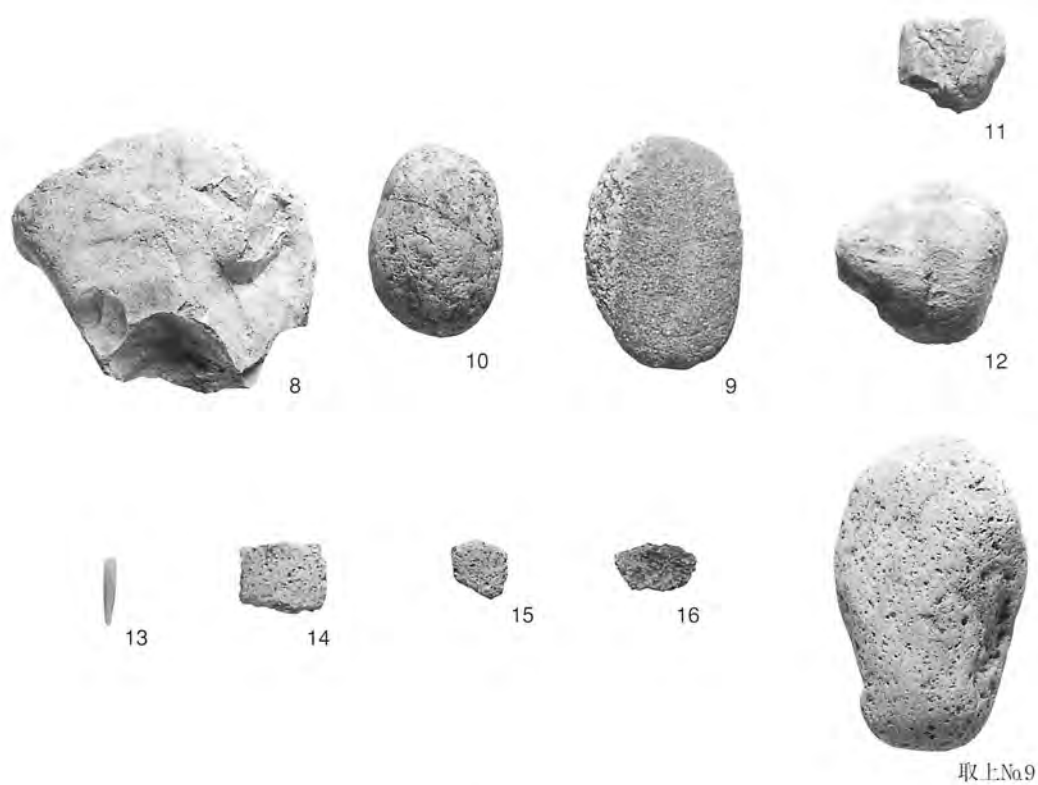
4 T 拡張区完掘状況 (南西→北東)



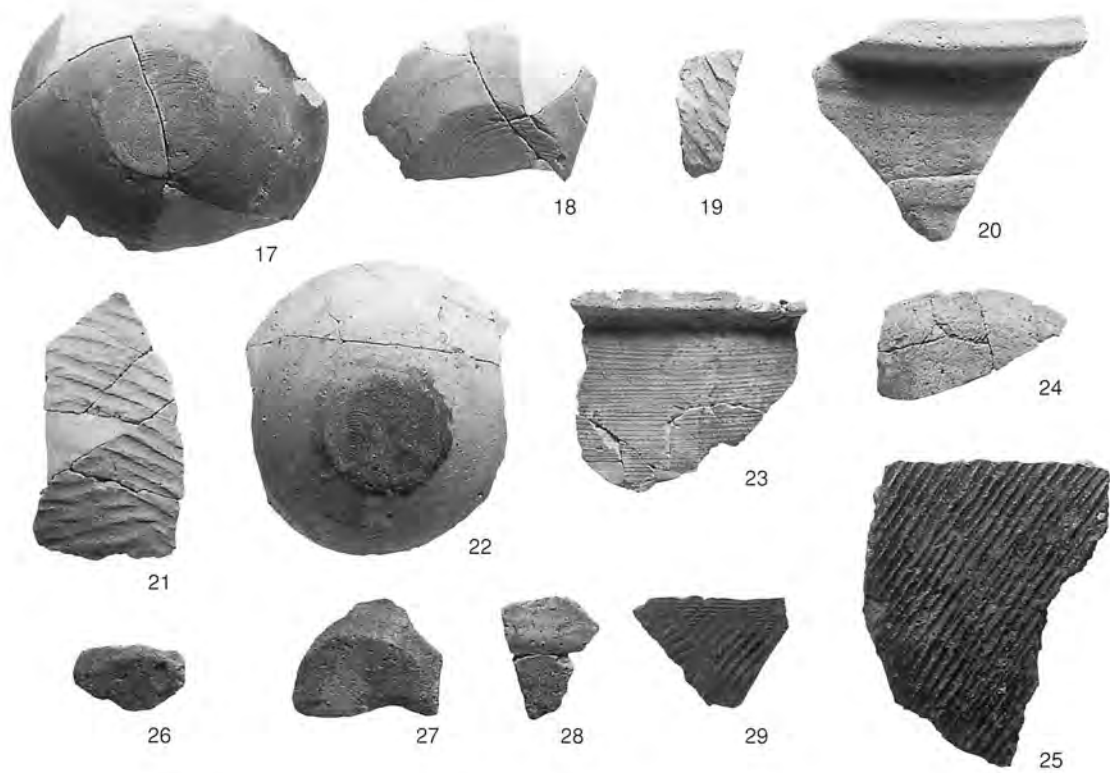
石器



石器



石器・礫・縄文土器



古代・中世土器



# 報告書抄録

ふりがな	あたござわいせきはつくつちようさほうこくしょ							
書名	愛宕澤遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	新津市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立木 宏明・澤野 慶子・早田 勉							
編集機関	新津市教育委員会							
所在地	〒956-0035 新潟県新津市程島 2009 番地 TEL 0250-24-2111							
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 7 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あたござわいせき 愛宕澤遺跡	にいがたけんにいっし 新潟県新津市 くさうざまち にちようめ 草水町 2 丁目 224 番地 ほか	15207	93	37° 37′ 00″	139° 08′ 48″	19980902~ 19981009 20010831~ 20010917	1692.8㎡	民間開発に伴 う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
愛宕澤遺跡	遺物包蔵地	縄文時代草創期 古代 (9世紀) 中世	ブロック 1 か所	局部磨製石斧・打製石 斧・石核・礫器・敲石・ パステル形石製品、縄 文土器・土師器・須恵 器・珠洲焼				

## 愛宕澤遺跡発掘調査報告書

2004年 3 月 7 日発行

発行 新津市教育委員会  
新潟県新津市程島2009番地  
〒956 - 0035 TEL (0250) 24 - 2111

印刷 (株)平電子印刷所  
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地  
〒970 - 8024 TEL (0246) 23 - 9051

『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』正誤表

頁	行	誤	正
とびら	図	Prefechure	Prefecture
5	10	0.2～0.3cm	0.2～0.3m
5	24	浅間草津黄色軽石	浅間草津軽石
17	44	1998a	1999a
18	38	19943	1994
奥付	14	あたごさわいせき	あたごさわいせき